

ミュージアム・マーケティング時代の 客と財的サステナビリティ



2006年10月

ニール・コトラー博士

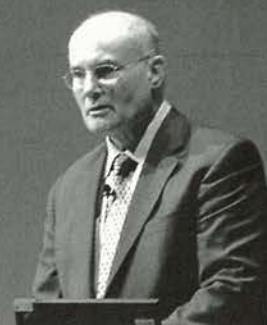
Museum Marketing Consultants ©

CREATE RESOURCES, OFFER DISTINCTIVE VALUE, PROVIDE
EXPERIENCES, PROGRAMS, SERVICES, AND FACILITIES

ミュージアム・マーケティング・シンポジウム

21世紀、ミュージアム・タウンの創造と展望

～関わりと拡がりのマーケティング～



特別事業「ミュージアム戦略とマーケティング」シンポジウム

目次

【特集】

文化庁平成18年度優秀指導者特別指導助成「ミュージアム戦略とマーケティング」
シンポジウム事業開催にあたって

ニール・コトラー氏を迎えて

ミュージアム・マネージメント・フォーラム—地域のミュージアムが生き残るために—

JMMA会長（長崎歴史文化博物館館長） 大堀 哲 ……2

JMMA特別事業担当理事 川津尚一郎 ……3

金沢美術工芸大学助教授（JMMA中部支部長） 角谷 修 ……8

【論考・提言・実践報告】

友の会とボランティアの倫理規程 —WFFMによる倫理規程の策定と活動—

Code of Ethics for Museum Friends and Volunteers— Code of ethics and activity of WFFM—

お茶の水女子大学大学院 菅井 薫

國學院大学大学院 須藤 友章

立教大学大学院 諏訪紗弥子 ……10

デジタル機器を利用した双方向展示場ガイドシステムの試行

国立民族学博物館 加藤 謙一

（株）国際電気通信基礎技術研究所／（株）ATR-Promotions

高橋 徹、高橋 真知 ……17

Smithsonian Research Associate 松本 栄寿 ……25

早稲田大学大学院 藤澤まどか ……34

JMMA事務局 高橋 信裕 ……42

「スミソニアンジレンマについて —EXHIBITING DILEMMASの著者インタビューを通して—

ミュージアム・マネージメントと地域再生

これからの博物館の在り方に関する提言について（予告）

【時の話題】

第6回全国企業ミュージアムグッズ人気コンテスト入選一覧

NPO法人企業ミュージアムの協会 亀田 訓生 ……48

【掲示板】

JMMA第12回大会プログラム（案） ……51

【インフォメーション】 ……52

特 集

昨年10月26日（木）、東京国立博物館にて開催いたしましたシンポジウム「21世紀、ミュージアム・タウンの創造と展望～関わりと拡がりのマーケティング～」について特集してご報告します。

文化庁平成18年度優秀指導者特別指導助成
「ミュージアム戦略とマーケティング」
シンポジウム事業

開催にあたって

JMMA会長（長崎歴史文化博物館館長）

大 堀 哲

去る10月26日（木）午後、（独法）東京国立博物館を会場としてミュージアム・マーケティング・シンポジウム「21世紀、ミュージアム・タウンの創造と展望～関わりと拡がりのマーケティング～」を開催した。本シンポジウムは、文化庁が博物館等の優れた指導者を海外から我が国に招待し、我が国の学芸員等に対して指導、助言することにより、博物館等の活動の質を高め、我が国芸術文化の一層の向上を図ることを目的に行っている「優秀指導者特別指導助成事業」であり、本学会がその助成を受けて実施したものである。5月の総会の時点では今年度の事業計画になかったが、文化庁の助成が得られるチャンスをとらえて、急遽、本学会が主催者となり、（株）乃村工藝社共催で実施することにしたものである。

本学会が主催することとした以上、学会に相応しい内容のプログラムにすべきだという会員の方々からのご指摘を尊重するのは当然であり、そのために川津、高安、水嶋の理事を中心に真剣に議論を重ね、乃村工藝社の担当者とも意見の調整を行ったところである。会場は予想を超える多数の参加者で盛況であった。ただし、その内容がどうであったかは参加者の評価にゆだねるしかない。

プログラム展開のメインは、勿論、ニール・コトラー氏の基調講演「創客時代のミュージアム～ミュージアム・マーケティングの視点より～」とセッション1・パネルディスカッション「国内博物館の試み」であった。

ニール・コトラー氏は、マーケティング思考の導入はミュージアムの創客活動に如何に貢献するか、との問題意識に立ち、今日、人々の余暇の過ごし方、ビジターの増えるスピード以上にミュージアムの競争が起きていること、ビジター数の減少、コストアップ、厳しい財政など博物館の抱える問題に直面する中で、顧客に対して最大の価値を提供することの重要性、ビジターの価値と博物館の価値の交換・バリューのエクスチェンジ（ビジターが喜び、興味を

感じ、何かをラーニングして人生の弾みにしたいこと、そして博物館も素晴らしい学びをビジターに提供したいと考えていることなど）のプロセスがマーケティングの目的であること、などを強調した。さらに、ミュージアムは顧客満足のために戦略的かつ戦術的マーケティングが必要であると、魅力的な商品～誰もが知っている展覧会、超有名作品展などが重要であること、ミッションの明確化をはかり、マーケティングリサーチ（顧客を増やすために競争相手を掘り起こす～どんな人が来てくれるのかのリサーチ～、来た人が満足しているかどうかのリサーチ）の必要性などについて話された。必ずしも我が国の博物館に適用できることばかりではないだろうが、いくつかのヒントは得られたのではないかと思う。

パネルディスカッション「国内博物館の試み」は、コーディネーター水嶋英治常磐大学大学院教授と3人のパネラーが登場して行われた。まず、東京都写真美術館館長の福原義春氏から、写真美術館の経営改革に取り組んだ最大の成果やその際のマーケティングの活用、今後の経営改革の方向性について話された。また、文部科学省大臣官房政策課の栗原祐司氏は、アメリカ滞在中に訪問した相当数の博物館の実態および博物館行政へのマーケティング対応の可能性等について論じられた。さらに大堀は長崎歴史文化博物館館長、しかも学芸部門を含む本格的な指定管理者制度として全国的に注目度の高い博物館長の立場から、マーケティングの実際とその自己点検・評価への反映、ミュージアム・マネジメント学体系化に際しての評価とマーケティングの問題の関連性等について言及した。重要なテーマにしては十分な時間がなく残念であったが、水嶋教授の適切かつ絶妙な司会によって、博物館を取り巻く環境が確実に変化するなかでの博物館経営改革におけるマーケティング戦略についての議論が活発に展開された意義は大きかったと考える。JMMAにおいては、これまでにマーケティングの問題について研究部会等において研究発表が行われたことがあるが、これを幾にこの問題の各論に関する議論が一層深まることを期待したいものである。

本シンポジウムの持ち方については反省すべきことも少なくなく、今後のJMMA運営に活かしていかなければならないが、会員の皆様のご支援に心から御礼を申し上げたい。

ニール・コトラー氏を迎えて

JMMA特別事業担当理事
川津 尚一郎

アメリカから著名なミュージアムコンサルタントであるニール・コトラー氏を迎え、10月26日に東京国立博物館平成館で国際フォーラムが開催されました。

今回はこれまでの特別事業とは違い、文化庁の助成をあおぎ、乃村工藝社との共催事業という形をとりました。乃村工藝社さんのご尽力で多くの協賛社さんにご参加いただき、いつもにも増した盛会でありましたことは大変うれしいことでありました。

フォーラムの内容は「報告書」の形で詳細に報告され、会員の方々に配付されますから重複を避けます。

日本のミュージアムが抱える諸課題を一つ一つ乗り越えようとしている関係者の為に有益で示唆に富んだ方向性の一つを提示されたものと受け止めております。

続いて登壇されたコシノジュンコ氏、蓑豊氏、パネルディスカッションにおける報告や議論のいずれもが多くの示唆をご提示いただきました。

ご多忙中快く来日されたコトラーご夫妻、ありがとうございました。

ニール・コトラー氏の招請にご尽力いただきました慶應義塾大学名誉教授井関利明先生はじめ、今回の協賛各社、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

■事業概要

本事業は、文化庁の「平成18年度優秀指導者特別指導助成」を受けて実施されたのもで、事業内容は以下の通りである。

(1)「平成18年度優秀指導者特別指導助成」事業について

本事業では、スミソニアン協会のマーケティング実務担当者として16年勤務され、現在は、博物館、文化史跡、観光のマーケティング・コンサルタントとして活躍される、ニール・コトラー博士を招聘し、同氏が研究・実践されてきたミュージアム戦略とマ

ーケティングの理論と方法について、シンポジウム及び講演等を実施した。

主事業として、シンポジウム「21世紀、ミュージアム・タウンの創造と展望」を、東京国立博物館の平成館大講堂において開催。コトラー氏による基調講演「創客時代のマーケティング」では、アメリカのミュージアムで実践されているマーケティング活動と、マーケティング理論を体系的に紹介された。その後のプログラムでは、この基調講演をうけ、東京都写真美術館長の福原義春氏、金沢21世紀美術館館長の蓑豊氏をはじめ、講師の方々が自ら実践している活動を紹介する形を取り、マーケティング理論と実践に関する情報が提供される講演となり、参加した310名の聴講者から高い満足を得ることとなった。

また、国内の美術館・博物館の課題の把握、課題対応などのケーススタディーとして、京都国立博物館、金沢21世紀美術館、三井記念美術館、日本科学未来館への視察と、管理者との意見交換を実施した。金沢では、市民を巻き込んだ活動で注目を集める、金沢21世紀美術館を視察し、金沢美術工芸大学と共に、博物館及び行政関係者、大学関係者など90名を集め、「ミュージアムと観光 マーケティング時代の創客活動」をテーマに、講演会を実施した。

1. 事業名 平成18年度優秀指導者特別指導助成
「ミュージアム戦略とマーケティング」シンポジウム事業
2. 受入団体名 日本ミュージアム・マネジメント学会
3. 優秀指導者名 ニール・コトラー博士
4. 事業期間 平成18年9月11日(月)～平成19年1月26日(金)
5. 招聘期間 平成18年10月20日(金)～平成18年10月28日(土)
6. 会場 東京都台東区上野公園13-9
「東京国立博物館」
平成18年10月26日(木)
石川県金沢市小立野5-11-1
「金沢美術工芸大学」
平成18年10月24日(火)

■招聘講師（ニール・コトラー博士）指導日程 計9日

実施時期	計 画 事 項			備 考
	行 程	会場・移動手段	指導者宿泊先	
10月20日	来日（ワシントン～成田）	第1回打合せ（乃村工藝社）	東京泊	
10月21日	東京	都内文化観光施設 視察	東京泊	（助成対象外）
10月22日	東京→京都	新幹線 京都国立博物館	京都泊	視察後意見交換
10月23日	京都 京都→和倉温泉	東寺宝物館 視察 在来特急 加賀屋 視察	七尾泊	（助成対象外）
10月24日	和倉温泉→金沢	在来特急 金沢21世紀美術館 視察 金沢美術工芸大学 講演会	金沢泊	参加者90名
10月25日	金沢→東京 東京	航空機 三井記念美術館 視察 第2回打合せ（乃村工藝社）	東京泊	視察後意見交換
10月26日	東京	東京国立博物館にて シンポジウム「ミュージアム 戦略とマーケティング」開催	東京泊	参加者310名
10月27日	東京	日本科学未来館 視察	東京泊	視察後意見交換
10月28日	出国（成田～ワシントン）	航空機		

■打合せスケジュールと内容

10月20日（金）	来日 17時から19時まで第1回打ち合わせ 会場：乃村工藝社会議室 シンポジウム開催に向けて顔合わせと予定の確認をおこなった。 出席者：コトラー博士、コトラー夫人、 JMMA理事 堀由紀子、高安礼士、川津尚一郎、高橋信裕
-----------	--



コトラー博士とコトラー夫人



JMMA理事との打合せ風景

10月22日（日）	14時から17時まで京都国立博物館にて視察と意見交換 1時間の意見交換の後、館内を視察した。
-----------	---



京都国立博物館での意見交換



京都国立博物館での意見交換

10月24日（火）	14時から17時まで金沢21世紀美術館視察 18時から20時まで金沢美術工芸大学にて講演会
-----------	--



金沢美術工芸大学での講演するコトラ博士



金沢美術工芸大学の会場風景

10月25日（水）	14時から16時まで三井記念美術館にて視察と意見交換 視察後1時間意見交換を行なった。
-----------	--



三井記念美術館での意見交換



三井記念美術館での意見交換

同 日	17時から18時まで第2回打ち合わせ シンポジウムの進行調整と全般的意見交換 出席者：コトラー博士、コトラー夫人、 JMMA理事・大堀哲、沖吉和祐、高安礼士、川津尚一郎、高橋信裕
-----	--

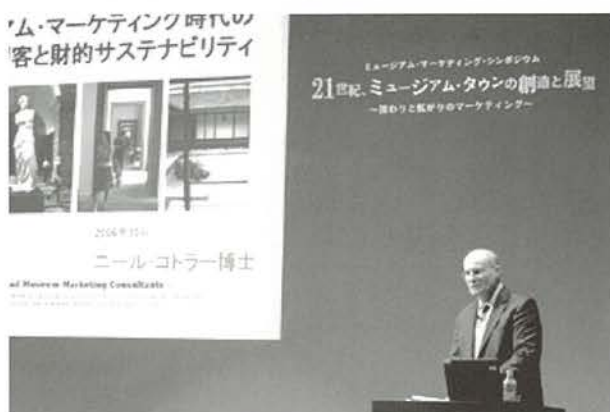


JMMA関係者とニール・コトラー博士との情報交換会議



アメリカと日本の制度や国民性の違いなどが議題となった

10月26日(木)	13時より17時30分まで東京国立博物館にてシンポジウム開催 冒頭1時間30分ニール・コトラー博士が基調講演。その後、蓑豊氏（金沢21美術館長）と コシノジュンコ氏（デザイナー）による対談形式のプレゼンテーション。引き続いて、わ が国の博物館の試みについて官学財界のリーダー等によるシンポジウム（パネルディスカ ッション）が行われた。
-----------	---



シンポジウムで基調講演をするコトラー博士



蓑氏とコシノ氏による講演



パネルディスカッション



会場風景

■シンポジウムプログラム

開会挨拶 大堀 哲 日本ミュージアム・マネージメント学会会長

基調講演 『創客時代のミュージアム ～ミュージアム・マーケティングの視点より～』

ニール・コトラー Kotler Cultural and Museum Marketing Consultants 代表

プレゼンテーション 『博物館の創客戦略 ～出会いと感動の経験価値づくり～』・

コシノジュンコ デザイナー・NPO間代表

蓑 豊 金沢21世紀美術館館長・金沢市助役・大阪市立美術館館長

セッション①パネルディスカッション『国内博物館の試み』

福原 義春 株式会社資生堂名誉会長・東京都写真美術館館長・社団法人企業メセナ協議会会長

栗原 祐司 文部科学省大臣官房政策課企画官

大堀 哲 日本ミュージアム・マネージメント学会会長・長崎歴史文化博物館館長

コーディネーター

水嶋 英治 常磐大学教授・日本ミュージアム・マネージメント学会理事

セッション②『ミュージアム・マーケティングの展望』

井関 利明 慶應義塾大学名誉教授

石田 和晴 スミソニアン・インスティテュション フリーア・ギャラリー・オブ・アート・

アンド・アーサーM.サックラー・ギャラリー マーケティング・支援開発スペシャリスト

コーディネーター

水嶋 英治 常磐大学教授・日本ミュージアム・マネージメント学会理事

閉会挨拶 沖吉 和祐 日本ミュージアム・マネージメント学会副会長

(本シンポジウムの詳細はJMMAから報告書としてまとめられ、各会員に送られます)

(2)優秀指導者特別指導助成として実施した効果について

①博物館にマーケティングの手法を用いること

冬の時代とも言われる博物館界は、この時代を抜け出するための様々な試みがなされているが、有効な手段を見つけ出せていないのが現状だと言える。そのような現状を踏まえ、米国で来館者開発の手法として注目されているミュージアム・マーケティングを紹介することが今回の目的である。関係者の一部には博物館にマーケティングの手法を用いることには抵抗を感じる向きもあるが、マーケティングの概念を原点から見直す論考によって誤解は解けたと思われる。むしろ博物館の本質的機能は維持しながら、来館者との関係作りを行なっていく、マーケティングの試みは博物館の存在をも問われている現状を打開する手法として有効ではないかと、明るい希望を持たせるものだったのではないかと。

②既知の知見をもう一度、疑ってみる

公立の博物館にとって来館対象者は広く一般市民であって、特定の層に限定することは設置条例からも好ましくないとされている。そのためにかえって来館者像が曖昧になり、それぞれの集団のニーズを掴めず、有効な戦略が組めていないのではないかの指摘を受けた。現実の人員と予算では、全ての層に向けた対応をすることは不可能であることから、現状を正しく調査し捉えることによって、ターゲットとなる対象

層を定め、そこから戦略を拡大していくことが大切であると提言された。

同じく、従来わが国の博物館では全ての来館者に平等のサービスの提供が求められるとされていたが、これも的確な戦略をもって、来館者の貢献に対し対価としてのサービスを連動させ、公平であることの方がインセンティブを与える意味で大切であることが提言された。

建前が優先され、結果的には対策が図られてこなかったことがあるのではないかと。あらためて合理的考え方の有効性を知ることができたと思われる。

③手探りで試みてきたことがマーケティング理論のなかに位置づけられた

多くの博物館では経常的な来館者を獲得する努力がさまざまに行なわれてきた。発表のなかでも手探りで、必死になって取り組んできた事例が紹介された。

その多くの試みは自然とマーケティングの手法を用いていたことを知ることができる。コトラー氏の整然としたマーケティング理論の体系のなかに自身の行ってきたことを位置づけることによって、今後すべきことまたは前に戻って確認しておかなければならないことなどが明らかにすることができたと思われる。

④関わりの存在としての顧客への気付き

来館者の増えることを望みながら、一人一人

の来館者像を認識することがなかった。その来館者の一人ひとりと博物館が関係を形成することがさまざまな博物館の経営困難を克服する手立てとなることを学んだ。

博物館を人との関わり、社会との関わり、歴史との関わり等、さまざまな関わりのなかで捉えることの重要性に気付かされた。

⑤欧米から学ぶ

海外と日本を比較して、近代化を完成した日本には最早学ぶものはないとする立場と、国の歴史や文化の違いから、学んでも日本の風土にそぐわないため土着はしない、そのため学ぶこ

との無意味を言う人々もいる。今回のテーマではどうであつたろうか。確かに博物館の成立の過程や受け入れる社会の価値観も違っている。しかし情報化の時代を迎え多くの競合する施設や活動とオーディエンスの時間を争っている博物館の外部環境は共通している。大切なことは違いを違いとして認め合いながら、学び合う関係の樹立が必要なのではないか。一方的に日本が劣っているわけではない。日本の伝統文化を守り受け入れている国民性は米国にはないことだとコトラー氏は言われた。相互が理解し合い相互を自国の鑑として確認し合うことが大切であると学ぶことができた。

ミュージアム・マネージメント・フォーラム —地域のミュージアムが生き残るために—

金沢美術工芸大学助教授 (JMMA中部支部長)

角 谷 修

はじめに

さる10月24日(火)金沢美術工芸大学美術工芸研究所主催にて、ニール・コトラー博士の講演会を開催した。この講演会は、本学会と(株)乃村工藝社が立案を行い文化庁の優秀指導者特別指導助成としてコトラー博士を招聘したものである。今回の講演会より2日後の10月26日(木)に東京国立博物館平成館において博士と各界の著名人を招いてフォーラムが実施された。金沢では、その他石川県インテリアデザイン協会にも協賛いただき、大学の教職員、学生をはじめ石川県、金沢市の博物館、美術館関係者及び行政関係者が参加されたと共にインテリアデザインの専門家を含めた約90名の出席者により開催された。

ニール・コトラー博士を金沢に招いて

今回の開催に至ったのは、博士自身の希望により能登方面まで来られていた事情もあるが、今年度北陸エリアへの学会の存在を知らしめる目的があった。数年前よりその使命を伺っていたが、なかなか進められずにいた現状があった。その意味からも今回の機会は、ぜひ生かしたいと考えて特に博物館、美術館の関係者及び行政関係者を中心に説明と参加を促した。また地元のデザイン団体においても専門家をはじめ教員、経営者等幅広く在籍しており、参加を進めて、石川県インテリアデザイン協会に協賛をいただいた。

その上で今回金沢美術工芸大学に全面的に協力を得ることが出来、学内の美術工芸研究所において海外の学識者やアーティストらを招いての事業「海外作家講演会」にて開催することとなった。これで講演会開催環境が整い約一月前より広報の準備に取りかかり、リーフレット1000部、ポスター(リーフレットのデータを利用)10部、石川県インテリアデザイン協会による講演紹介状200部を作成した。また当日の大学正面玄関に看板と学内会場へのサイン関連及び講演時の手元資料としてのパワーポイントのダイジェスト版150部を合わせて作成した。このよ



金沢美術工芸大学研究所内歓迎会



講演会会場風景

うな準備のもと当日の午後にコトラ博士ご夫妻及び翻訳者の井関利明慶応義塾大学名誉教授、スミソニアン協会職員の石田和春氏と大堀学会会長ご夫妻、学会理事の高橋信裕氏らをお迎えした。はじめに大学内研究所の施設にて金沢美術工芸大学学生部長の輪島道友教授より歓迎の挨拶があり、本学事務局長の小村 隆氏、石川県インテリアデザイン協会副会長の村上彰彦氏及び今回の通訳を担当する早川芳子氏らの紹介があった。

午後5時30分より学内の会場（第1教室）にて開会され、研究所国際交流センター長の横川善正教授より英文スピーチによる歓迎挨拶にてはじまった。また大堀会長から金沢にて開催する意義とコトラ博士の略歴の紹介後、講演をスタートさせた。博士の講演内容は6項目に分かれており、以下のような視点に基づき進行された。

- ・ミュージアムにおけるマーケティングの意義
- ・顧客の視点とそのニーズを探ることの重要性
- ・マーケティング・プランニング及びマーケティング・ミックスの設定
- ・ブランドイメージを構築する
- ・ミュージアムが提供する価値やサービスの質を高める
- ・観光都市としてのブランドイメージ構築と価値創造

講演は通訳の早川芳子氏を通して話され、同時にパワーポイントによる図表やデータを表示して約1時間30分で修了。その後コトラ博士の紹介により井関利明名誉教授によりマーケティング論の解説をお話いただき、さらに石田和春氏にはスミソニアンでの現状について報告をいただいた。

会場から3件の質疑があり「学芸員のトレーニングについて」、「ミュージアムの価値について」、「グッゲンハイムの展示について」以上を博士より回答いただき午後8時すぎに講演会を修了した。参加者の内訳は教職員・学生が5割弱、博物館・行政関係者3割弱、インテリアデザイン関係者1割、その他1割であった。

博士の提言と会場からの反応

ミュージアムにおいてマーケティングがどのように活用されるのか特にその最前線で活動されている方々には大変示唆に飛んでいたと思う。博士のマーケティング理論を援用したミュージアム活性化への取り組みは、地元の博物館、美術館の閉塞感に明るい展望を見いだすヒントになったはずである。また具体的な面では、顧客の設定、ニーズの把握と分析、コミュニケーションの関係性の中に新たな価値が生まれ、ミュージアムの発展と成長の鍵が秘められている。このようなマーケティング理論に基づく経営への示唆が必要であると認識を新たにした。さらに金沢での開催のためにコトラ博士より観光について事前いくつかの質問（観光ガイドによる金沢の印象について、観光産業の目玉、観光客の反応・探求するもの）を受けており、その方面についても詳細な講演をいただいた。金沢の課題として、歴史・文化のアイデンティティを担うミュージアムのステータスは高く、社会資本の整備においても重視されてきたが、その経緯からミュージアムの集客力の向上に対して特に関心が高い。そのためその分野での考え方や手法、取り組みに対する体系的な理論や事例の習得の機会が必要である。このように金沢の観光都市としての価値を理解いただき今後の国際観光都市としてのさらなる飛躍に対する提言をいただいた。

今後の課題

大学としては、現在アートマネージメントの教育を強化する計画であり、その立場で専門の教員及び参加した人が多かった。その意味で今回の講演会は多くの収穫を得たと感じたが、今後継続して関連の分野の専門家による指導の必要性を求めたい。また石川県及び金沢市は、共に文化施設の管理運営について模索しているところであり、今後各方面の専門家の示唆を取り込みたいと願っている。このことは石川県と金沢市との連携を計り、国際観光都市としての位置づけをこれまで以上に明確にすることも視野に入れている。



井関名誉教授のマーケティング論解説



会場の質疑に答えるコトラ博士

論考・提言・実践報告

友の会とボランティアの倫理規程

—WFFMによる倫理規程の策定と活動—

Code of Ethics for Museum Friends and Volunteers

— Code of ethics and activity of WFFM—

お茶の水女子大学大学院 菅井 薫

國學院大学大学院 須藤 友章

立教大学大学院 諏訪紗弥子

1. 解題

本稿は、ミュージアムフレンズ国際連盟（WORLD FEDERATION OF FRIENDS OF MUSEUMS以下、WFFMと略す。）によって作成された「友の会とボランティアの倫理規定」とWFFMのウェブサイトにおいて公開されている組織概要の一部を翻訳したものである。WFFMは、1975年に設立された非営利・非政府組織であり、文化遺産の保護を目的とした意見交換やミュージアムフレンズに関する各国の連盟、組織の設立と発展を促進する活動を行っている。会員は30カ国以上、150万人に及ぶ。倫理規程の策定には、Louis Dussault（カナダ）、Clare Moorhead（アメリカ）、John Brundell（イギリス）、Suzanna de Barry（アルゼンチン）の四氏から構成される倫理規程委員会が中心となって関わっており、1996年にメキシコのオアハカで開催されたWFFMの第9回世界大会において採択されている。

この倫理規程は、博物館活動への市民の関わりということに関して、博物館と市民の双方がどのような価値観を持ち、行動していくことが可能であるのかを具体的に示している点で大きな意義を持つといえる。具体的にどのような状況において、この倫理規程が意味を持つのかということについては、次の三点が挙げられる。第一は、これから博物館活動に関わっていこうとする市民が行動を起こすにあたって、どのような立場からの取り組みが可能であるのかを考えていく際の立脚点となるという点である。第二は、これから市民と共に活動を行っていこうとする博物館が市民の存在をどのように捉え、位置づけていくことができるのかということについての大きな枠組みを提示しているという点である。第三は、既に博物館活動に市民が関わるようになって何年も経つ組織や博物館が、自らの活動を振り返るにあたっての一定の指標として機能するという点である。それ以外にも、活動に関わる市民や職員の入れ

替りが生じた場合などに、多様な価値観と動機を持つ参加者が合意形成をしていく際の叩き台ともなり得るだろう。

なお、訳出に際して、“Museum Friends”、“Friends of Museums”をどのように翻訳するのかということが大きな問題となった。これまでには、「友の会」「ボランティア」「支援組織」などの日本語訳があてられてきたが、いずれもWFFMによる定義と比較すると狭義なものになってしまう。そこで今回は、基本的に「ミュージアムフレンズ」という訳語をとることにした。この言葉が指す対象については、Section 1での定義を参照して頂きたい。ただし、倫理規程の文章の中で、“Friends and volunteers”などのように並列して使われている場合に限っては、より訳を分かりやすくするため、「友の会とボランティア」という、日本において比較的定着しつつある用語を訳語として用いた。

倫理規程及び組織概要の翻訳にあたっては、以下のミュージアムフレンズ国際連盟（WFFM）の理事会の主要メンバーと倫理規程委員会の委員長より、2005年9月末に日本語での翻訳の許可を頂いた。

Carla Bossi-Comelli（会長・メキシコ）Louis Dussault（倫理規程委員会委員長・カナダ）Julia Oh（前事務局長・シンガポール）Lila de Chaves（事務局長・ギリシャ）Carol Serventy（アフリカ・アジア太平洋地域代表・オーストラリア）

また、今回の翻訳を通じて、倫理規程のコンセプトが日本において共有され、WFFMの新たなメンバーとなることを望んでいるというメッセージを頂いた。翻訳を快く承諾して頂いたことに、深く感謝申し上げたい。それと同時に、博物館活動に関わる多くの方々が、それぞれの組織や博物館において、この倫理規程を活用され、新たな協力関係が国内外に広がっていくことになれば幸いである。

2. 友の会とボランティアの倫理規程¹⁾

はじめに

博物館における友の会とボランティアは、文化の発達において崇高な目的を追究しており、博物館に援助、知識、経験、能力をもたらすとともに、博物館と博物館学の両方の発展に寄与する。友の会とボランティアの参加は、コミュニティにおける市民としての役割に積極的に取り組むという自発的な連帯を表明するものである。

友の会とボランティアは、博物館コミュニティの一員として、博物館の中心的存在である特権を持つ利用者によって構成され、博物館において最も有利な立場で市民の興味関心を表す。

さらに、博物館における友の会とボランティアの立場は、忠実な支持を表す博物館に対する一定の義務（責任）を意味する。したがって、有益な協力を保証する多くの要件を満たすことに合意する。

博物館の活動過程において、友の会とボランティアの貢献や支援の価値を認めることが重要で、十分に生産的な協力は相互関係の質によって決まる。

この倫理規程を用いることによって、友の会及びボランティアは活動する博物館に関する期待を表し、いきいきとしたパートナーシップを築く行動指針を規定することができるだろう。

Section 1：定義

ミュージアムフレンズ (Friend, Volunteer)

博物館の支援・発展や公共的存在感・影響力に何らかの貢献をする人々は「ミュージアムフレンズ」(friends of museums) と呼ばれる。ミュージアムフレンズは、自発的且つ無報酬の原則にもとづいて行動する。支援は、道徳上、財政上のもの、または、ボランタリーな活動や知識から成る。後援者、寄付（寄贈）者、博物館の役員会のメンバー、博物館の構成員は全てミュージアムフレンズ (friends of museums) と見なされる。

組織 (Association)

「組織」(association) という用語は、構造化された活動や友の会やボランティアをまとめる全ての組織形態を対象とする。法的に設立されているようにまいと、これらの組織、団体もしくは委員会は関係する博物館に公式に認定されていれば活動することができる。

博物館 (Museum, Museum Institution, Institution)

この文書において、「博物館」(museum、museum institution、institution) という用語は同義語である。ICOMによって認められ定義されているように²⁾「博物館」(museum) に言及している。つまり、非営利の常設機関である博物館は公共の利益と市民が利用しやすくするために運営され、芸術作品、科学資料、生物無生物、歴史的、技術的資料を含む、教育的且つ文化的価値のある標本や資料を保存、研究、展示する。

「博物館」(museum、museum institution、institution) という用語は一部もしくは全てにおいて博物館的特徴を示す、すなわち、エコミュージアム、インタープリテーションセンター、展示センター (exhibition centers)、文化遺産や歴史的建造物、植物園、動物園、水族館、他の博物館学的な種類の組織のような、いかなる組織も含まれる。

Section 2：地位と権限

2.1 パートナー

友の会とボランティアは、自由な形で、パートナーとなっている博物館との協力（連携）の精神にもとづき活動を行う。

2.2 支援

友の会とボランティアは、寛大且つ熱心に博物館と博物館活動を支援することを約束する。

2.3 博物館の権限の尊重

友の会とボランティアが計画する事業、運営できる範囲、定める目標は、博物館の使命にもとづいて、博物館当局の参加と合意によって展開される。

2.4 満足

友の会やボランティアは決して利益、金銭、その他を望まず、所属する博物館の発展と維持、そして博物館が奉仕する一般市民を満足させることに貢献する。

Section 3：組織

3.1 組織

博物館との関係において、継続性と同様に十分に有益なパートナーシップを進めるためには、例えば、団体（協会）のような構造化された枠組みに組織化されることが望ましい。

3.2 運営上の結びつき

直接且つ永続的な博物館との結びつきを保証するためには、友の会とボランティアは運営上、博物館を信頼することが不可欠である。そのためには、博物館は友の会とボランティアが運営に関して同様に関わられるように、組織における運営の代表を任せるべきである。

3.3 行動計画と協定

友の会とボランティアは博物館と共に、博物館との協力関係の基盤となる規約を定める協定と行動計画を作成することが望ましい。

Section 4：義務

4.1 必要条件と規則

友の会とボランティアは、博物館の規則や要件を尊重する必要性を認識すべきである。

4.2 忠誠

活動をしていくにあたって、友の会とボランティアは支援する博物館と自らの組織の両方に忠誠を示すべきである。

4.3 守秘義務

博物館の運営や未発表の活動に関するいかなる情報についても、守秘義務を遵守すべきである。同様に、友の会やボランティア組織の事業活動にも適用

される。

4.4 利害の衝突

利害の衝突を避けることや、博物館と友の会やボランティア組織の両方によって規定された規則に従うことに必ず敬意を表すようにすべきである。

4.5 贈答と収集

友の会やボランティアは芸術作品、採取した標本や資料を寄贈する際、本物であることや出所を保証するように極力努め、博物館の規則に従うべきである。

4.6 博物館の十分な同意

友の会やボランティアからの寄付は博物館の収集方針にもとづくもので、博物館の十分な同意を得るべきである。博物館は収集したい個々の作品、資料もしくは標本を事前に情報公開することが望ましい。

4.7 資金調達

友の会とボランティアは自分たちの資金調達活動を博物館の計画や事業と調整すべきである。

4.8 メディア

メディアとの関連において、友の会とボランティアは博物館の関連する部門の同意を得て活動すべきである。

4.9 安全衛生

博物館の安全衛生規則に従い、適用を妨害しないように注意すべきである。

Section 5 : 運営範囲

5.1 運営範囲

友の会とボランティアの運営範囲は非常に幅広い。運営範囲は各博物館固有の性格、使命、個別の目標、提供するプログラムにあわせて設計される。

5.2 常勤職員に限定される運営範囲

常勤職員によって管理されている運営範囲においてボランティア活動を行う際、特に、学芸員の専門分野、研究や広報において、友の会やボランティアは関連のある職員の合意によってのみ活動すべきである。常勤職員が従う義務を尊重すべきである。

5.3 重複の防止

博物館の運営は常勤スタッフに限るべきではなく、友の会やボランティアは自発性を発揮する豊かな活動領域を発見するかもしれない。その際、友の会やボランティアは、活動が職員の責務と重複しないように気をつけなければならない。

5.4 仕事の定義

原則として、友の会とボランティアが使命を果たすことが求められる全ての運営範囲において、活動手段や仕事の定義にもとづいて行動することが望ましい。

Section 6 : 博物館に関する期待

6.1 評価

友の会とボランティアは、博物館と職員が博物館の内外において、自らの参加と貢献を有効に活用し、発展を促し、認めることを望む。

6.2 支援

博物館は友の会やボランティアの組織形成を促すべきで、冒険的事業を支援すべきである。博物館と友の会やボランティアの組織に共通する目標を追求するために必要な資源を自由に使ってもよい。

6.3 調和

博物館は、博物館と友の会やボランティア組織との間の調和の取れた関係を促進したり、所属意識や結束を重視すべきである。

6.4 通知

友の会とボランティアが受け入れ可能な領域で活動することを実現するためには、博物館は使命、短期・長期の目標、将来計画、事業活動と運営上の手続きを十分に伝えることを保証すべきである。

6.5 研修

友の会やボランティアの貢献を保証するためには、できるだけ有効に、博物館は支援が求められている領域において、研修機会を提供すべきである。熟達を増すための講義やセミナーやワークショップに参加することを促すべきである。

Section 7 : 共同

7.1 会員

友の会とボランティアは組織の会員数の維持と拡大に重点的に取り組むべきである。

7.2 民主主義の原則

組織の内部で、友の会とボランティアは民主主義の原則を尊重し、会員共通の意見を公平に代表することを保証しなければならない。

7.3 共有

友の会やボランティア組織は相互に協力することを義務であると考え、知識や経験を共有する。

7.4 博物館や博物館の専門家との協力

友の会とボランティアは、特に活動への参加を通して、様々な博物館や博物館の専門家の組織と協力すべきである。

7.5 友の会やボランティア組織との間の協力

より有益で広範囲に自発的に貢献するため、そして博物館への公的支援の範囲を明らかにするために、市町村 (local) の友の会やボランティア組織は都道府県 (regional) や国における友の会やボランティアのグループの活動を支援すべきである³⁾。

7.6 国際的活動

国際的レベルで、友の会やボランティアは対応する連盟であるミュージアムフレンズ国際連盟(WFFM)や国際博物館会議(ICOM)を支援する。

注釈

この倫理規程において、条項は相互の関連で解釈される。たとえ明らかに規定されていなくても、例えば、4.3.と4.4.の条項において言及されている守秘義務と利害の衝突に関する通則は、寄付や収集に関する4.5.と4.6.の条項に当てはまる。

この倫理規程は、1996年10月21日から25日までメキシコのオアハカで開催されたミュージアムフレンズ国際連盟の第9回世界大会で採択された。各連盟や各組織は独自の倫理規程を作成するために、この倫理規程を参考にすることが勧められる。

倫理規程の改正手続き

倫理規程の改正は基本の文章と同じ程度の重みを持ち、倫理委員会はWFFMの倫理規程の改正手続きに同意する一方で、WFFMの理事会は次に述べる事柄からなる改正手続きを推奨する：

1. いかなる人または組織も博物館における友の会やボランティアの倫理規程の改正を提案し、倫理委員会の委員長に伝達をするWFFMの倫理規程委員会または事務局長に文書で提案をすることができる。
2. 委員会のメンバーは提案された改正案を評価し、多数が賛成すれば、理事会に適切な提言を行う。
3. 理事会はその後、提言を承認もしくは却下するか、さらに検討するために倫理委員会に差し戻すことができる。
4. いかなる規程の変更も総会での理事会によって報告された後に公式のものとなる。

委員会のメンバー：Louis Dussault (カナダ・委員長)、Annick Bourlet (フランス)、Rosemary Marsh (イギリス)、Carla Bossi-Comelli (メキシコ)、Clare Moorhead (アメリカ)

謝辞

WFFMは、倫理規程の起草に貢献して頂いた以下の方々に深く感謝する。

ケベック州文化通信省、カナダ・ミュージアムフレンズ連盟、メキシコ・ミュージアムフレンズ連盟、WFFM倫理規程委員会、倫理規程の準備に参加して下さった全ての方々。

3. ミュージアムフレンズ国際連盟(WFFM)の概要⁴⁾

3-1. はじめに

ミュージアムフレンズ国際連盟(WFFM)とは、世界中の様々な言語圏で活動を展開するボランティア組織である。当連盟は、各国におけるミュージアムフレンズの代表となる連盟が加盟するActive Members、ミュージアムフレンズの各団体が加盟するAssociate Members、企業が加盟する法人会員(Corporative member)、個人会員(Individual Members)などの諸会員によって構成、運営されている。さらに、個人会員(Individual Members)に関しては、“正会員、寄付会員”に分類されている。

会員は年次協議会並びに総会において、情報、会報、出版物を交換し、活動を報告する。

現在、17ヶ国の連盟がActive Membersとして加盟している。例を挙げれば、400団体のミュージアムフレンズを包括するフランス、180団体を包括するカナダ、30団体を包括するノルウェー、8団体を包括しているポルトガルの連盟などである。そして、Associate Membersには25団体以上のミュージアムフレンズが加盟している。全体として、WFFMには友の会やボランティア、後援者などを含めて150万人を超える個人が参加しているのである。またWFFMは外部組織との連携も重視している。特に類似組織である国際博物館会議(International Council of Museums=ICOM)とは緊密な関係を構築してきた。WFFMがICOM総会におけるミュージアムフレンズに関する公開会議へ参画することを数度に渡って依頼されていることから分かるように、ICOMとWFFMの関係は年々強化されてきている。また、WFFMは2002年の『the News ICOM』第4号のミュージアムフレンズ特集号でいくつかの記事に参加するという栄誉をも受けた。以上の様な協力の積み重ねにより、WFFMの倫理規程はICOMによって公式に承認され、我々はミュージアムフレンズの役割を認識し、共同行動を促進するという2つの条項を協議するに至った。現在、これら2つの条項はICOM独自の倫理規程に含まれている。

現ICOM会長であるJacques Perotは、バルセロナで開催されるICOM2001年度総会にWFFMを招いた。WFFMはこの依頼に応じ、総会において2001年7月2日12時30分から13時45分で開催された最初の並列セッション、「ICOM並びにICOM委員会の会議」のプログラム中に、ラウンドテーブルを準備することとなった。この際の「博物館の運営における社会の責任」というテーマのセッションは、WFFM会長であるCarla Bossi-Comelliがコーディネートし

たものである。

最後に WFFM 世界大会に関して述べておく。世界大会は1972年以来3年毎に催されており、有益且つ成功裡に開催されてきた。世界大会は友の会やボランティアを魅了することは勿論、WFFMとアイデアや情報を共有出来るということで博物館の理事や職員をも惹きつけている。

3-2. WFFMとは何か？

WFFMとは如何なる組織であるのか。WFFMの活動の歴史や組織体制の概要を知ること、その全体像を把握していく。

まずは、WFFMの歴史(表1参照)について、見ていくことにする。世界中で数千ものミュージアムフレンズが活動しているにも関わらず、Luis Monrealとバルセロナの各博物館のミュージアムフレンズによって国際的組織の下にミュージアムフレンズを集めようという最初の一步が踏み出されたのは、1972年のことであった。その年の6月に、バルセロナにおいてミュージアムフレンズの国際会議が初めて開催された。この国際会議には24のミュージアムフレンズから150名の代表者が出席し、各国の連盟を通して「相互理解の促進、情報及びサービスの交換、蓄積された経験の共有」を目的として結成された国際連盟が必要だという提言に参加者達は合意した。

1975年、オーストラリア、ベルギー、フランス、イギリス、ポーランド、イタリアの6ヶ国の各連盟は、ブリュッセルでの第2回世界大会においてWFFMを発足させた。

1978年にフィレンツェにて開催された第3回世界大会までに、WFFMの理事会は年々着実に増加していた加盟各国の連盟の会長或いは代表者を取り決め、そしてWFFMの仕事の多様な側面や果たし得る役割を明確化していく。結果、フィレンツェ世界大会での提言は広範囲に及び、その一部は達成に長い歳月が費やされた。例えば、ある提言は博物館におけるボランティア従事者の慎重を要する問題についてのガイドラインを扱うもので、後に倫理規程へと発展することになる内容であったが、最終的に採択されたのは1996年のオアハカでの第9回世界大会においてであった。他にもミュージアムフレンズは教育分野において活動するべきという提言や、重要な文化遺産の保護を目的とした博物館への寄付が優遇されるように国の法令に働きかけるべきという提言、ICOMやUNESCO(国連教育科学文化機関)との関係を構築していくべきといった提言なども同様に議論された。最後の提言に関しては長年に渡る根気強い陳情運動の結果、1989年、UNESCOはWFFMを

協力関係を結ぶ非政府組織として承認している。また、ICOMに対するWFFMの初期のオブザーバーとしての地位に関しても、総会での長年の活動報告により向上されていった。

しかしながら、WFFMの主な役割は世界的規模でのミュージアムフレンズの提案の促進や情報交換だけではない。WFFMは3年毎に開催される世界大会を通じて、その役割を果たしているのである。世界大会は1週間程の会期で、世界中のミュージアムフレンズを歴史的或いは考古学的に興味を持たれる場所に招待して開催されている。各大会のテーマは各国連盟の協力の上、理事会によって決定される。世界大会には作家、建築家、考古学者、歴史学者を含む文学や文化における著名人や、世界の大規模博物館の学芸員の様な専門家も招いている。各大会は州政府や地方官庁もしくは主催国連盟の代表を務める著名人の後援で開催される。

次にWFFMの理事会、執行委員会、会員制度などの組織体制に関して簡略に説明する。WFFMの理事会は会長、Active Membersの全ての代表者、選抜されたAssociate Membersの代表者、名誉委員、事務局長、会計担当者などから構成されており、年に1〜2回の割合で会合が持たれている。理事会には執行委員会が設置されており、南・北アメリカ、ヨーロッパ、アジア太平洋の各地域から選出された、会長、事務局長、会計担当者、議長などの幹部によって組織されている。これら執行委員の人事は3年毎の選挙によって決定される。年次総会に関しては、全ての個人会員とAssociate Membersの会長や代表にも開かれている。これら公式の会議は各国で開催されており、大抵の場合、主催国連盟は総会に合わせてミュージアムフレンズに関連したセミナーを企画している。この1日限りのイベントはWFFM会員向けの催事ではあるが、一般市民にも時折公開されている。WFFMの世界的活動並びに主催国自身のミュージアムフレンズの活動に関心を持ってもらうためである。

WFFMの全ての会議には、特別展のオリジナルガイドツアーや非公開のプライベートコレクションを鑑賞する機会など、主催国連盟により準備された文化的且つ社会的なイベントも組み込まれている。

3-3. WFFMの目的と活動

WFFMは国際的非営利、非政府組織として、1975年にベルギーで法的に設立された。WFFMの主要な目的と活動は、下記の6項目である。

1. 文化遺産の保存に関して意見と経験を交換するため、各国の多くのミュージアムフレンズを結

び付けることに協力する。

2. 世界中のミュージアムフレンズの団体と各国の代表となる連盟の設立及び発展を促進し、博物館の質の向上のためにミュージアムフレンズのイニシアチブを支援する。
3. 国際的組織、特にICOMやUNESCOなどとの文化的協力活動の展開において、ミュージアムフレンズを代表する。
4. 博物館職員とボランティア、若者や一般市民との連携を促進する。WFFMはコミュニティへの開かれた積極的な参加を通じて、これらの目的が達成されると信じている。
5. ミュージアムフレンズが倫理規程を作成する際に参考とするため、友の会やボランティアのための倫理規程を規定する。
6. 毎年の総会と3年毎の国際大会により、ミュージアムフレンズの情報や意見を交換する。

3-4. ミュージアムフレンズとは？

ミュージアムフレンズはWFFMの根幹であり、本稿で紹介する倫理規程の直接の対象でもあるため十分に理解しておく必要がある。しかしながら、ミュージアムフレンズを知る前に、まず始めに博物館とは何かを知らなければならない。以前は専ら、「博物館とは古代史、自然史、芸術などを説明する資料を保存、展示することに用いられる建築物」と認識されていた。博物館の多くは、未だにこの様な分類が適用される。しかし、建物をさえ持たない博物館もまた多いのである。そこで展示されている資料は鉄道機関車、クラシックカー、玩具、服飾、民芸品、農具など、非常に幅広い。こうした様々な資料を扱う博物館としては、こども博物館、野外博物館、公園、古い工場、庭園や更に多くの館種が挙げられるであろう。

現代の博物館が多様化しているように、ミュージアムフレンズも多様化しているといえる。しかし、共通の目的があるとするのであれば、それは所属する博物館を支援するということである。ミュージアムフレンズは様々な方法でその目的を実践している。例えば、教育プログラムの実施や特別展の準備、或いは受付やミュージアムショップ、カフェテリアの運営など、博物館の様々な部門を支援するためにボランティアは自身の時間を提供しているのである。他にも、展示が見られない大人や子供に博物館を持っていくボランティアもいる。資金調達に専念する友の会もある。カルチャーツーリズム、外国への専門的なツアーの手配、言語サポートなどの活動も挙げられよう。受動的過ぎると思われるかもしれない

が、ミュージアムフレンズは、一般人や非専門家といった一般市民の声を博物館に届けるということを実現してきた。実際に、年月を重ねるにつれて、ミュージアムフレンズの熱心な活動と提案は博物館自身に変化を引き起こした。博物館を市民に近付け、市民を博物館に近付けたのである。

ミュージアムフレンズの歴史は長い。世界で最初のミュージアムフレンズは、1857年、オーストリアのVorarlberger Landesmuseumsvereinに設立されたものである。以後、1884年にオーストラリアのBallart Fine Arts Public Gallery Association、1897年にベルギーのKoninklijke Maatschappij Woorhet Museum voor Kunst van Gentにも設立された。ミュージアムフレンズ設立の流れは20世紀に継続していくが、当時の博物館を支援する人々というのは概してエリート層であり、国立や地方の美術館を援助することで一定の名声を得た美術工芸収集家や富裕な後援者達によって構成されたものであった。しかし、こうした様相は第二次世界大戦後に変化する。戦後、教育を受ける機会が広まったことやUNESCO、ICOMの様な国際的組織の創設と共に、博物館や文化に対する態度全般が変容したためである。博物館が一般化していく中で、先進的な考えを持つ学芸員は様々な方法で博物館を援助してくれるミュージアムフレンズの設立を働きかけていった。こうした動きは特にヨーロッパや北アメリカにおいて大きくなり、そして最終的には世界中に拡大したのである。

注

- 1) 倫理規程の英語版原文は、WFFMのホームページ (http://www.museumsfriends.org/Ingles/i_codigo.html) (2005年10月検索) で公開されている。
- 2) ICOMによる定義は、2001年に開催された第20回バルセロナ大会において修正・採択されている。定義の原文は、ICOMのホームページに掲載されている制定法 (<http://icom.museum/statutes.html>) (2005年10月検索) のDefinitionsを参照されたい。また、本稿では、“museum”を「博物館」と翻訳しているが、定義は上述のICOMによるものと同様である。
- 3) “local”と“regional”では、後者のほうが国の中の「～地方」などの広い範囲を指し、“local”はそれよりも狭い範囲を表している。ここでは、それぞれの意味を分かりやすくするために、日本の「都道府県」「市町村」に置き換えて解釈することとした。
- 4) 本章はWFFMホームページ (<http://www.museumsfriends.org/Ingles/index1.html>) (2005年10月検索) を参考として作成した。また、訳出にあたっては、原文に忠実な和文を心がけながらも、部分的に言葉を補うことによって、自然な文意になるように配慮

した。

5) Highlights of the WFFM History ([http://www.](http://www.museumfriends.org/Ingles/i_historia.html)[museumfriends.org/Ingles/i_historia.html](http://www.museumfriends.org/Ingles/i_historia.html)) (2005年10月検索) をもとに作成。表1. WFFM年表⁵⁾

年	出 来 事
1972	・第1回WFFM世界大会(6/19~23) ～開催地:バルセロナ(スペイン) バルセロナの各博物館のミュージアムフレンズと Luis Monrealにより開催。
1975	・第2回WFFM世界大会(6/16~21) ～テーマ:「博物館とミュージアムフレンズとのつながり」開催地:ブリュッセル(ベルギー) ・第2回世界大会にて、WFFMが法的に設立される。WFFM定款(規則)が作成され、公用語は仏語、英語の2カ国語、WFFM会報は年2回発行することなどが取り決められる。
1978	・第3回WFFM世界大会(6/6~11) ～テーマ:「環境、文化遺産、生涯教育」開催地:フィレンツェ(イタリア)
1979	・事務総局はノリッジ(イギリス)移転。
1981	・第4回WFFM世界大会(6/14~21) ～テーマ:「ミュージアムフレンズと遺産」開催地:パーミンガム(イギリス)
1984	・第5回WFFM世界大会(7/2~6) ～テーマ:「どちらの公共であるか?」開催地:パリ(フランス)
1985	・WFFM定款(規則)の修正。新しい会員区分が公開される。
1986	・WFFMの博物館における記録、UNESCOの4半期評価が4ヶ国語で印刷される。 ・Benaki Museumが主催する国際学会(11/23~26)が開催される。 ～テーマ:「博物館と博物館の使命、挑戦、チャンス」開催地:アテネ(ギリシア)
1987	・第6回WFFM世界大会(6/15~19) ～テーマ:「変容:変化という課題」開催地:トロント(カナダ)
1990	・第7回WFFM世界大会(4/2~6) ～テーマ:「博物館:都市における拠点としての文化センター」開催地:コルドバ(スペイン) ・カナダミュージアムフレンズ連盟(CFFM)の会員で、ケベック州友の会・ボランティア協会(RQABM)の会長も務める、Louis Dussaultをミュージアムフレンズ倫理規程(code of ethics for friends of museums)採択のための進行役に任命するというCFFMが提案した決議案が採択される。
1992	・WFFM執行委員会(カナダ:ケベック) ・ICOM第16回総会の一部門としてRQABMは道義的行為という概念に関するセミナーを開催。 ・UNESCOの雑誌『Museum』No. 176の発行(友の会特集号)。
1993	・第8回WFFM世界大会(6/1~4) ～テーマ:「文化遺産の保護と振興における住民参加の再生」開催地:トレビゾ(イタリア) ・第8回世界大会の一部門として、友の会とボランティアに適用する倫理についての円卓会議を開催。 会議上で、国際倫理委員会を設立し、その委員長としてLouis Dussaultが任命される。
1994	・キプロス博物館協会とWFFMの共催により、海外セミナーが開催される。 ～テーマ:「ミュージアムフレンズの役割」開催地:ニコシア(キプロス) ・スペイン語が第3公用語として指定される。
1995~ 1996	・WFFMの国際倫理委員会が使命を果たすことを支援するため、RQABMは倫理規程を起草する役割を担うワーキンググループを組織。
1996	・第9回WFFM世界大会(10/21~25) ～テーマ:「博物館の未来とミュージアムフレンズ」開催地:オアハカ(メキシコ) ・第9回WFFM世界大会にて、国際倫理委員会は、RQABMが作成した倫理規程本文、CFFMの援助で作成された英語版、メキシコミュージアムフレンズ連盟の援助で作成されたスペイン語版の検討を完了する。10月25日、「友の会とボランティアの倫理規程」という正式なタイトルで最終案が採択された。
1999	第10回WFFM世界大会(9/13~17) ～テーマ:「新しい世紀、新しい博物館、新しいミュージアムフレンズ」開催地:シドニー(オーストラリア)
2001	・ポルトガルで総会が開かれる。
2002	・第11回WFFM世界大会(10/7~11) ～テーマ:「なぜミュージアムフレンズなのか?」開催地:ブエノスアイレス(アルゼンチン)
2005	・第12回WFFM世界大会(10/18~22) ～テーマ:「博物館とミュージアムフレンズ:新たな現実との直面」開催地:セビリア(スペイン)

デジタル機器を利用した双方向展示場 ガイドシステムの試行

国立民族学博物館

加藤 謙一

(株)国際電気通信基礎技術研究所／

(株)ATR-Promotions

高橋 徹、高橋 真知

はじめに

国立民族学博物館では2006年春の特別展において、(株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)と共同で、デジタル機器を利用した双方向の展示場ガイドシステムの開発と試行を実施した。このシステムはATRが開発した博物館展示ガイドシステム「ubiN EXT (ユビネクスト)」をもとにしたものである^(注1)。博物館施設で電子機器を利用したガイドはもはや珍しいものではない。それは専用の音声機器からPDAや携帯電話、iPodに代表されるデジタル・オーディオプレーヤに至るまで使用するデバイスは幅広い。情報の提供方法も、展示場におけるバーコードの読み取り、赤外線や無線LANをつかったデータ配信から利用者が自宅でウェブを通じてダウンロードしたデータを自分の所有する機器に入れて来館するタイプまでさまざま。

本稿で報告する事例もそうしたデジタル機器を利用したガイドシステムのひとつであるといえる。しかし従来のものと最大の違いは、機器が来館者の好みに応じて次の展示物を提案しながらガイドを進めていく点である。来館者の好みを判断するために、来館者が展示物と自分の関係性に基づく評価をおこなうプロセスを加えることで、展示物と来館者とのあいだに双方向的関係が生み出される。通常、展示場が企画者側の意図に沿ってデザインされた固定的空間として存在する以上、来館者は展示物を特定の展示テーマを通じて接することになる。そんな固定化されがちな展示にさまざまな観点を設け、来館者自身でそれらの資料を選択しながら観覧経験を重ねることで、より来館者の側に立った観覧環境が生み出されることを期待できるのである。

本報告では、ガイドシステムの試行を通じて得られた利用者のアンケート結果とシステム・ログの分析から、(1)機器を仲介役とした展示と来館者の双方向性によってもたらされる、展示物を多様なテーマ

でみることのできる環境下で、来館者がどのような観覧行動をとり、その過程と結果を来館者自身がどのように評価しているか、(2)双方向型展示ガイドの可能性と課題という2点を中心に論じる。

1. 展示の概要

試行をおこなったのは、2006年3月16日から5月30日にかけて国立民族学博物館で開催された特別展「みんなくキッズワールド：こどもとおとなをつなぐもの」である。展示のキーコンセプトは、世界の諸民族の社会において子どもがどのように捉えられているのかをおとなから子どもへ贈られる「ギフト」としての民族資料を通じて紹介し、どんな社会でも子どもは大人から慈しみを受け、大切にされているという普遍性と、その表現方法の多様性を提示することにあった。

会場は2階構造になっており、展示の構成も1階部分が民族資料を中心としたギフトのコーナー、2階部分は体験的要素をふんだんに盛り込んだコーナーとなっている。来館者は受付をすませると白い幕が天井に向けて円錐状にのびる「プロローグ」の空間に入る。ここは母親の胎内の子宮をイメージしており、展示場に入る心の準備をしてもらう場である。子宮に続いては、身をかがめて進む「産道」を通過して会場中心部にある「へその丘」に出る。来館者は出産時の胎児を疑似体験して、母親の胎外に出てくるという趣向である。へその丘では世界各地の出産直後に行われる習俗を紹介する標本資料を展示している。へその丘の周囲には世界各地の名前をプリントした「名前のカーテン」がかかっている。名前は大人が子どもに与える最初の贈り物と捉えたからだ。展示場全体は特定の順路を設けない自由導線とした。そのためカーテンはどこからでも次の展示コーナーへ出られるようになっている。このカーテンを抜けると、へその丘を囲むように置かれた世界のゆりかごの展示の先に、1階部分の展示の中心である「ギフト」の展示コーナーが展開している。

本論で報告するガイドシステムの試行は、このギフトのコーナーを対象に行ったので、ここでは若干詳細に立ち入ってこのコーナーを紹介しておきたい。このコーナーの最大の特徴は、展示資料がすべて木製の箱の中に入れられて展示されているという点である。箱の中の資料を見るには、箱の側面に施したのぞき穴や、縦方向や横方向に約5センチの幅で施されたスリットからのぞく必要がある。これらの穴

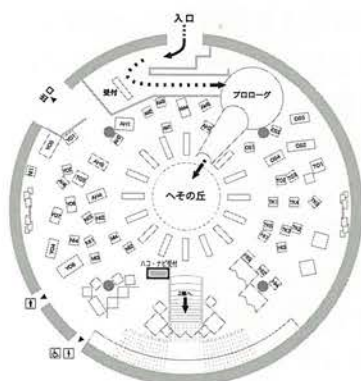


図1：会場一階の見取り図

やスリットの位置には決まりがあり、例えば片方の目でのぞくようにあけられた穴は箱の下部に施され、その高さはちょうど子どもの目線に位置している。一方、縦スリットは大人の目線で見えることを想定し、横スリットは車椅子を使用する来館者の目線を意識したものである。丸いのぞき穴と縦方向のスリットは、のぞく人の年齢を考慮して、のぞいた視線の先にある解説パネルの内容も子ども用と大人用とで別々のものを準備した。

企画者側で「遮蔽展示」と呼んだこの手法を採用した目的は二つある。一つは「のぞく」という行為によって、来館者の展示物へのまなざしがより能動的になり、結果として資料との間により濃密な時間を過ごすことにつながると考えたからである。いま一つは大人が子どもののぞき穴をのぞくことで子どもの目線を身体的に経験し、子どもの頃の思い出や子どものまなざしに思い至ってほしいと考えたからである。なお、展示場内には、こうした実験的な展示手法を試みていることと、上記の二つの目的を記載したパネルを掲示して来館者への周知に努めた。

ギフトのコーナーを構成するそれぞれの資料は、「学びと遊び」、「装い」、「信仰・祈り」、「大人への入口」、「子どもを護る」、「思いを託す」という6つのテーマに分けて箱におさめた。全部で46個ある箱は、「オセアニア (OS)」「アメリカ (AM)」「ヨーロッパ (YO)」「アフリカ」「西アジア (NI)」「南アジア (MI)」「東南アジア (TO)」「東アジア (HI)」「中央・北アジア (TK)」という地域単位で展示場内に配置された。各箱には、オセアニア地域のものなら「OS」というように、地域を表すアルファベット2文字に続けて通し番号をふり、木箱の側面にラベル表示した。

このように会場1階部分には、木箱でできた高さ2メートルほどの展示ケースが、会場中心の「へその丘」を囲むように配置されるという独特の展示空

間ができあがった。箱の数は他のコーナーのものも含めて約60個にのぼった。来館者は自由動線の会場を、文字通り箱の林を縫うようにして観覧していくのである。ガイドシステム用のコンテンツはギフトのコーナーにある箱単位で制作した。箱は全部で46個あるが、ガイドの対象としたのはこのうちの43個である。ガイドシステムの名称は、箱をナビゲートしていくことに因んで「ハコ・ナビ」とした。

1階部分にはギフトのコーナー以外にも、日本における人生儀礼を誕生から成人式まで紹介するコーナーのほか、日本の子どもの学びと遊びの変遷をたどるコーナーや「子どもをとりまく環境」にちなんだコーナーを設けた。2階へとつながる階段の踊り場には「なまえの木」コーナーを設けた。これは木の形の造形物に、来館者が自分の名前とその由来を記した紙を木の葉に見立てて結びつけていくというものである。

2階部分にはドイツの変身グッズや身の回りのもので変身を楽しむ「へんしん広場」、ボランティアグループが企画運営する「あそびの広場」、ハンズオン展示の「ものの広場2006」、民博のさまざまな活動を紹介する「みんなくミュージアム・アイ」という4つのコーナーで構成した。それぞれのコーナーは完全に独立しているが、来館者が自ら積極的に展示と関わることを促す体験的展示である点が共通する。

2. システムと運用

●システムの概要と特徴

ハコ・ナビのシステムは、ATRが開発したubiNEXTを今回の展示向けに仕様を変更したものである。ubiNEXTはサーバと携帯端末との間で無線LANを使って情報をやりとりする。携帯端末側から発信された情報をサーバ側のJavaプログラムが処理し、その結果を含むWebページをサーバがHTMLで構成して端末のWebブラウザ上に表示するという、いわゆるWebアプリケーションとして構築されている。利用者は利用登録時に発行されるIDを入力してシステムにログインする。ubiNEXTでは、来館時の利用以外にも来館前に自宅でシステムにアクセスして、興味のある展示物をピックアップしてオリジナルの見学コースを作っておき、来館時にガイド機器をつかって見学コースを巡ることができたり、来館後は自宅から見学履歴を確認するといった機能も備わっている。なお、今回の試行では展示場以外の外部からサーバへアクセスする環境の構築を見送ったため、

来館する事前事後の利用機能は実装できなかった。そのため利用者の見学履歴情報は、機器の返却時にスタッフがプリントアウトして渡すことにした。

本システムでは、利用者が機器を操作したログデータがサーバに蓄積される。このデータには、利用者の観覧順序や展示物ごとの滞留時間、展示物に対する評価結果などがある。これらの客観的なデータとアンケート結果という利用者の主観的な評価データを分析することで、展示場における利用者の観覧行動を多角的に把握することができる。動線や展示方法の改善にあたっては、こうした情報が役立つことが期待できる。

次に冒頭でも少し触れた双方向性という点について述べておきたい。通常の展覧会では展示される資料は企画者側の意図する特定の観点で紹介されることが多い。ユビネクストでは、一面的に捉えられがちな展示資料に、あらかじめ多面的な複数の観点を設定しておく。来館者は、ある観点で紹介された展示資料に関する解説やクイズに答えた後に、この資料に対する評価をおこなう。それはたとえば、資料に対するお気に入りの度合いであったりするが、この評価基準は展覧会ごとに設定できる。システムでは、利用者がそれまでにどの観点で資料を見学したかという履歴情報と、その資料の説明に対する評価情報に基づいて判断し、次に見のに適切と考えられる観点を資料を推薦するのである。この仕組みを単純化すると、Aという観点で紹介された資料を利用者が気に入ったと評価すれば、次に推薦される資料はおのずとAに属するものが多くなり、逆に気に入らなければA以外の観点を資料が多くなるという具合である。これにより一つの資料にいくつもの観点が付けられていれば、同じ資料でも異なる観点ごとに異なるガイドコンテンツが提供できることになり、来館者は一つの資料に対して多面的にアプローチする手段を得ることができるのである。

●使用した機器

試行ではDellのAximとSONYのPSP（プレイステーション・ポータブル）という操作方法の異なる二つの機器を使用した。AximはPDA（Personal Digital Assistants）タイプで、操作方法是タッチパネルのカラー液晶画面を直接タップする。PSPは多機能ゲーム機として市販されており、操作方法是一般的なゲーム機同様に左手側に方向を指示する十字ボタン、右手側に「決定」や「取り消し」を指示するボタンが配置されている。今回の試行では、幅広

い年齢層を対象にしつつも、特別展のテーマ性から子どもにも興味をもってもらえるように、ゲーム機の導入を試みた。市販のPDAを展示ガイドシステムとして利用する例はめずらしくないが、PSPを利用するのは本試行が初の試みである^(注2)。なお、ゲーム機の中でPSPを採用したのは、試行時点では無線LANへの接続機能やubiNEXTを動かすためのブラウジングソフトが搭載されたものが当該機種以外になかったためである。



写真1：使用機器（左：Axim、右：PSP）

●コンテンツ

ハコ・ナビは、ギフトのコーナーの展示資料を箱単位でガイドしていく。箱には1点から4点ほどの資料が収められており、ハコ・ナビはそのうちの1点を取り上げてガイドしていく。一つの資料のコンテンツは、次のような6段階の画面遷移を通じて提供される。

1. 資料の画像、資料名、使用地の文字情報
2. 資料に関するクイズ
3. クイズの解答と資料解説
4. 来館者が資料とのつながりを評価
5. 評価に基づく推薦資料候補の提示
6. 利用者が選択した資料の位置情報

なお、プロセス5では推薦候補以外にも任意の資料のコンテンツIDを選択すれば、そのコンテンツを楽しむことができるようになっている。利用者はこのような画面遷移でコンテンツを楽しみながら、ガイドを薦めていくわけだが、ハコ・ナビには明確なゴールは設定しなかった。これはそれぞれの来館者のペースで利用してもらいたいというスタンスで開発を進めた結果だが、意識的に自分の観覧ペースを確認できるように箱を10個見終えるごとに、さらに続

けるかどうかを尋ねる画面を用意した。

企画者側では、このような構造を持つコンテンツを通じて次の3つのことがらの実現をめざした。それは、

1. 資料への観察を促す。
2. 解説パネルやキャプションではまかないきれない、より詳細な解説情報を提供する。
3. 資料の有する多様な観点を展示との双方向のやりとりを通じて提供し、多面的な展示体験を実現する。

である。1は、クイズの答えを導き出すために、資料をよく見ることを要求するような問題作りを心がけた。2は、クイズの問題と解答に関連した内容の解説情報を提供することを心がけたが、準備期間や資料の性質上、やむを得ずパネルと同一内容の解説になってしまったものや、クイズの解答以外の情報を付けられなかったコンテンツもあった。3に関しては、双方向的な関係性を展示と来館者の間に生み出すためのコンテンツとして、前出のプロセス4で資料とのつながりを評価する際の評価基準を「展示資料に子どもと大人のつながりを感じたか」とし、選択肢として「感じた」、「ふつう」、「感じない」を設定した。この評価基準は、社会の中で子どもがどのように位置づけられているのかをギフトを通じて紹介する、という展示コーナーのコンセプトに基づいて設定した。

●試行の概要と流れ

ハコ・ナビの試行は会期中の4月21日(金)～5月30日(火)の火曜日、金曜日、日曜日の合計18日間、午前10時30分から12時と午後1時30分から3時の時間帯でおこなった。この時間帯には、機器の貸出と返却のための受付窓口として移動式ワゴンを1階に設置し、通常は1名、混雑時には2名体制で窓口対応をおこなった。

貸出から返却までは、1. 希望者のユーザー名をノートPCで登録してIDを発行する。2. 利用者はIDを機器に入力してガイドをスタートする。3. 返却時には、アンケート用紙への記入を依頼。4. アンケート記入時間を利用して観覧履歴をプリントアウトして、利用者におみやげとして渡す。という手順でおこなった。

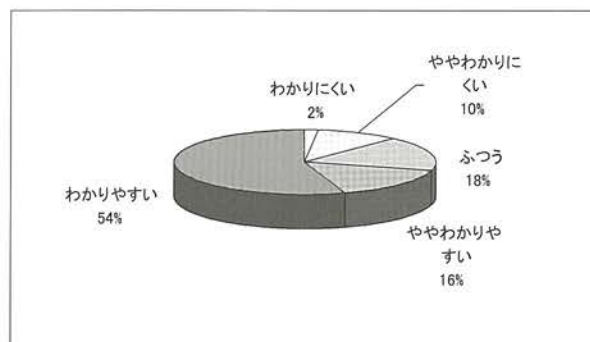
3. 利用者の観覧経験の実際

●試行結果の概要

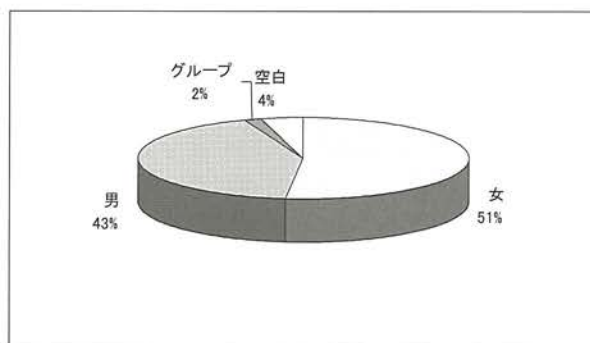
ここでは、「ハコ・ナビ」を利用した来館者の観覧

行動にみられる特徴を、利用者のログデータやアンケート結果をもとに検証してみたい。会期中にハコ・ナビの試行に参加した利用者は、複数回利用した例も含めたべ数で144人、発行したIDベースで139人だった。このうち利用後のアンケートが回収できたのは120人であった。用意した操作性の異なる2つの機器の利用は、圧倒的にPSPが多かった。実行委員会でPSPの新規性をアピールしたことに加え、来館者の注目度もPSPの方が高かったためだ。ゲーム機を使ったシンプルな操作方法に対しては、7割の利用者が高評価を与えてくれた(グラフ1)。

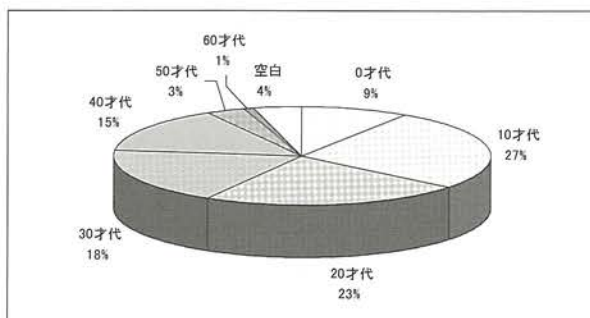
利用者の男女比は女性がやや多かった(グラフ2)。一般来館者を対象とした展示内容に関するアンケート結果でも女性の回答者が多かったので、全来館者に占める女性の比率が高かった可能性もある。この



グラフ1：機器の操作方法（アンケートより）



グラフ2：利用者男女比率（アンケートより）



グラフ3：年代別比率（アンケートより）

アンケート結果をみて男性より女性の方がハコ・ナビへの関心が高かったという判断を下すことはできない。年齢比率では10才代、20才代の利用が半数を占めるものの、0才代から50才代まで広く利用されているのが分かる（グラフ3）。0才代の利用の中には未就学児童も含まれるが、その場合は両親などの大人がいっしょになって、機器の操作を手伝ったり、読めない漢字を読んであげたりしていた。

●利用時間

ハコ・ナビのログデータから、実際に機器を操作していた時間である実利用時間と一連の操作の後に資料を見たり、次の箱へ移動する時間を含めた総利用時間が求められる。それぞれの最短、最長、平均を表1に示した。総利用時間は来館者が1階のギフトコーナーで過ごした時間と置き換えることができるが、報告者は展示場での観察からは、ハコ・ナビの利用者の方が展示場での滞在時間は長いという印象を持っている。各利用者がハコ・ナビを返却するまでにいくつの箱の中身を見たのかを示す利用回数は、最少が1回、最大が43回、平均は12回であった。

	実利用時間	総利用時間
最 短	1分05秒	1分05秒
最 長	36分01秒	1時間27分35秒
平 均	10分08秒	23分25秒

表1：利用時間（ログデータより）

●観覧行動の特徴

展示された資料で、利用者がよく観覧した資料とあまり観覧しなかった資料の上位5つをまとめたのが表2である。観覧回数が最も多かったアメリカ地域のウルナイフと最も少なかった中央・北アジア地域の子ども用衣装との間には5倍以上の開きがある。観覧回数の上位にある資料の展示場における位置に注目してみると、そこには、機器の貸出場所に近いものと、貸出場所から「へその丘」を挟んだ反対側にあるものという二つの特徴がある。報告者サイドの展示場観察時の印象では、利用者が最初に見る箱が上記の方向のものに多いという印象を持っているが、初回観覧資料の上位5つをまとめた表3からは、その傾向がある程度確認できる。つまりそのいずれもが貸出場所近辺と「へその丘」を挟んで反対サイドの資料なのである。特にMI4の文字練習板は総観覧回数69回の約半数にあたる32回が初回観覧で占め

られている。利用開始直後の何回かは、機器の推薦に関係なく手近な所にある資料を見ていくという観覧行動が多いため、多くの利用者がMI4に続けて、手近な資料を見ていったことが表2のような結果を生んだと想定できる。しかしこのような要因だけではAM1のウルナイフの観覧回数を説明できない。考えられるのは、AM1のコンテンツに付けられた観点の数が4つと他の資料より多いという点である。一般的にハコ・ナビでは観点が多ければ多いほど、他の資料からの関連づけのルートをたくさん持つことを意味するので、結果的に推薦に登場する頻度も高くなるのである。アンケートのコメントにも何度もAM1を推薦されてしまうといった指摘があり、場合によっては必要以上にAM1が推薦される状況が生まれていたようだ。

観覧回数の少ない資料にも、そこには二つの原因が想定できる。一つは、資料の位置が動線上の死角になっているということであり、いま一つは、それらの資料に対するハコ・ナビの推薦頻度が少ないということである。動線上の死角の問題では、該当する箱がすべて中心から奥まっており、他の箱とも近接、密集した状況にあるという共通点をもっている。一方、推薦頻度に関しては、資料ごとの全観覧機会に占める推薦に基づく観覧率は、YO2の子ども用衣服だけは0%であったが、他はほぼ50%付近であっ

資 料 名	箱 番 号	観覧回数
ウルナイフ	AM 1	77
文字練習板	MI 4	69
腕輪	MI 3	64
教会用衣服	YO 8	62
樹皮画	OS 1	56
子ども用衣服（競馬用）	TK 4	15
子ども用衣服	YO 2	15
押し車（玩具）	OS 5	16
子ども用衣服	TK 2	17
子ども用衣服	TK 3	20

表2：資料別観覧回数（ログデータより）

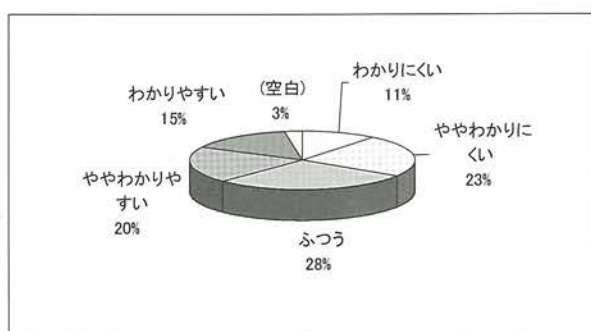
箱 番 号	回 数
MI 4	32
AM 1	16
NI 2	9
OS 1	8
MI 2	8

表3：初回観覧回数
（ログデータより）

た。以上のことから、YO2については推薦頻度が極端に少ないことが観覧回数の少なさに結びついている可能性が高く、それ以外の資料はむしろ、動線上の問題が大きく影響していると考えられる。

●コンテンツへの評価

ハコ・ナビでは推薦する資料の場所を地図で表示する機能を備えていた。画面上には現在見ている箱と次に見る箱の位置に印が付けられているのだが、箱で見通しのきかない会場の中で、「目当ての箱を探すことに苦労した」、「地図がわかりにくい」といったコメントが少なからずあった。地図のわかりやすさに対する選択式の質問でも、3割の利用者が、地図のわかりにくさを指摘する結果となった（グラフ4）。



グラフ4：ハコ・ナビの提供する地図について（アンケートより）

ハコ・ナビを使うことで得られる情報については、その内容をもっと充実させてほしいとか、動画や音声を活用した情報を提供してほしいというものが多かった。この結果はコンテンツを作り込む時間が足りなかったことで、十分な内容を用意できなかったという実行委員会側の反省点に直結するものである。その一方で少数ではあるが、解説パネルだと見過ごしてしまう情報を、クイズの解説として読み直すことで展示理解に役立ったというコメントもあり、パネルとは別媒体で同じ情報を提供するという役割も解説機器にはありえるようだ。

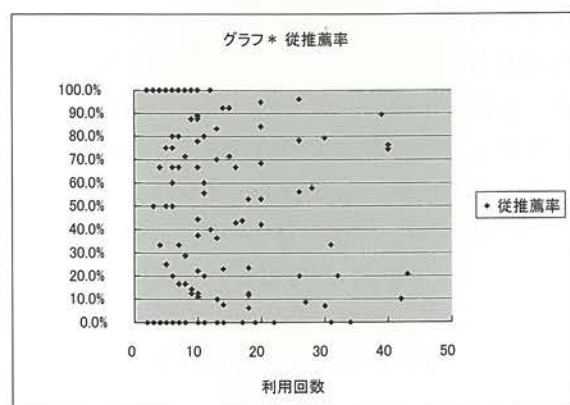
また、クイズがもたらす効果については、「クイズを答えていこうとすると自然と説明書きを読むようになり、使用していない時と比べて内容が頭に入ってきた」、「クイズに答えようとより関心を持って展示を見られた」というように、クイズに挑戦することが展示物をよりじっくり見ることにつながったり、資料への関心が高まることで、解説パネルの内容への理解も深まることを実感する利用者がいることが確認できる。また「ゲーム感覚でできるのはおもしろい」、「ゲーム機を使うことでわくわくする」とい

う感想からは、クイズというコンテンツの他にも、ゲーム機という機器の性格が利用者に及ぼす心的効果が大きいことを伺わせる。さらに「探検のように見て回れるのがよい」、「探す、という体験はなかなか楽しい」、「子どもは宝探しゲームみたいでたのしそうだった」というように展示場内で次に見る箱を探索するという要素も影響していることがわかる。これは、会場が自由動線であったことと、箱が林立して見通しがきかないという空間の特性、箱の中を覗いて資料を確認するという展示手法、そして、次に見る箱について、同じエリアの箱は推薦しないというハコ・ナビの設定が複合的に影響しているようだ。こうした会場や展示手法、ガイドシステムの特徴は、コンテンツのゲーム的感覚を相乗的に向上させる上で大いに効果を発揮していたといえる。その一方で、「（資料を）全部見たのか分からない」、「離れた場所の箱を探すのが疲れる」、「（コンテンツの）地図がわかりにくい」という否定的な意見も少なからず確認できた。

ハコ・ナビには、画面上で利用者とのコミュニケーションをおこなうキャラクターとして「みんパコくん」が登場する。この「みんパコくん」に対して、「かわいい」、「表情がいい」、「ネーミングがすてき」などの好意的な感想が予想以上に多く寄せられた。利用者と展示との双方向性を意識したシステムの中で、利用者が企画者側の予想以上に、展示との仲立ちをするキャラクターに意識を向けていることを確認する結果となった。

●推薦への反応

ハコ・ナビの特徴は、利用者が展示物と自分との関係性を判断する結果にしたがって次に見たらよい資料を紹介していく点にある。ここでは、ログデータから算出した「従推薦率」に注目して利用者の観覧行動を見ていきたい。グラフ5は機器の利用を終えた時点での利用回数別に従推薦率の分布を示している。これを見ると分布状況は、従推薦率50%のラインを境にほぼ対称であり、利用回数が増えるにしたがって、それまで50%付近に集中していた従推薦率の分布は、利用回数20回付近まで低率と高率の双方に向かって均等に放物線状に拡散していき、それ以降は低率が高率いずれかに二分されていくという傾向として現れている。これは推薦にしたがって観覧を進めていく利用者と、推薦には従わずに自分が見たいと思った資料を見ていく利用者が、それぞれの利用回数の中で偏りなく存在したこと、そして利



グラフ5：従推薦率分布（ログデータより）

利用回数が増えるにつれて推薦に従うか従わずに利用するか、どちらか一方の利用方法をとる利用者が多くなることを示している。

これを踏まえて、従推薦率が高い利用者と低い利用者はそれぞれ自身の観覧経験や機器に対してどのような評価を行っているのかについて、従推薦率20%未満と80%以上に属する利用者を対象にして、アンケート結果を比較検討してみたい。

従推薦率20%未満の利用は44件であった。観覧経験に対する評価のうち、ハコ・ナビの推薦に従ったかを問う項目では、従推薦率10%未満の32件では、ほぼハコ・ナビの推薦通りには見ていないと判断しているが、10%から20%の間にある12件では推薦に従ったという判断がやや目立ち、実際のログとの間にずれが生じている。この範囲にある利用者は従推薦率以上に、ハコ・ナビの推薦に従って機器を操作したことや、観覧した行動の印象が強いということがいえるかもしれない。従推薦率が低い要因を利用者のコメントから考えてみると、「興味のある箱をみていった」というように自分の観覧行動を肯定的に意味づけるコメントがあった。その一方で、「あちこち見るより近くから見ていきたい」や「提案の順路が今いる位置と合致せず動線が複雑」、「地図をもう少し分かりやすくしてほしい」というように、自由動線でなおかつ林立する箱で見通しがきかない空間特性と、機器が提供する地図が分かりにくいことが推薦に従わなかったことへの否定的な意味づけにつながっている場合も少なからず見られた。だが、ハコ・ナビを使うことで展示理解につながったかどうかや、機器に対する全体的な評価を尋ねる設問では、肯定的な評価が大半をしめていた。また感想欄にも、「初めての体験で楽しめた（30代女性）」、「クイズがあって楽しかった（10代男性）」、「クイズをすることで、より詳細に展示品を観察しようという動機付

けになった（30代女性）」という記述があった。このように機器の推薦に従わなくても、機器を使用して観覧することに各自が価値を見出し、その経験を肯定的に評価する来館者の姿を確認できるのである。

推薦率80%以上の層に属する49件では、ほとんどの利用者が機器の推薦にしたがったと回答していた。推薦した資料が自分の好みと合致したのかを尋ねる項目では、「合致しない」：1、「ふつう」：17、「合致した」：15、「わからない」：7、無回答：9という結果となった。「合致した」と記入した利用者のコメントの中には、「提案内容が自分の好みに合致していたのでおもしろかった」というものがあり、インタビューからも、「装い」の観点の付いた資料を選択することで、関心のあるアクセサリ関連の資料を巡ることができたという回答を得ている。なお、機器の推薦自体は必ずしも利用者の好みと合致していたわけではないようだが、「わからない」と回答した利用者の中には「自分の好みというよりは関連展示を順序良く見られた」とあるように、推薦に従った観覧経験の中で、利用者が資料と資料の間に関連性を見出していったと考えられる例もあった。機器を利用することが、展示の理解につながったのかどうかや、機器の全体的な評価については、いずれも高い満足度を得ることができた。コメントに見る高評価のポイントは、推薦された資料が自分の好みに合致したことのほか、「クイズ形式なので理解に役立つ（40代男性）」、「「ただ見る」よりも一歩踏み込んで「観る」ことができるのは良い工夫だ（20代男性）」、「ゲーム感覚でできるのでおもしろい（20代女性）」とあるように、クイズやゲーム的感覚が資料をよく見るにつながったり、観覧経験自体を楽しいものにする効果が認められる。なお、推薦率の低いグループの評価コメントとの特徴的なちがいは、箱を探すという経験への言及が多い点である。前記の「コンテンツへの評価」の中でも触れたような、次の箱を探す行為を「探検」や「宝探し」、「迷路感覚」などの言葉で表現していたのは、いずれも推薦率の高いグループに属する利用者であった。

4. まとめ

最後にハコ・ナビの利用者が機器を使用することで展示理解に役立ったかという点と、ガイドシステムの全体的な評価に関する結果を紹介する（グラフ6、7）。いずれも約75%の利用者が高評価を与える結果となった訳だが、利用者の機器の利用方法も観

覧行動もそれぞれに多様であることはすでに記してきたとおりである。この点は、次に見る資料を推薦するというハコ・ナビの特徴的な機能の利用方法についても当てはまる。操作ログデータとアンケート結果からは、利用者は推薦機能を利用しなくてもハコ・ナビを利用することに意義を見出していた。

従推薦率は、機器の利用回数が増えるに従って、高率が低率かのどちらかに二分されていく傾向が確認できたが、その背後には機器の利用環境に影響を及ぼしたいくつかの要因があった。それは第一に自由動線と見通しのききにくい展示空間の特性であり、また遮蔽展示という独特の展示手法やハコ・ナビの提供する地図の見やすさ、そして推薦先への移動距離であった。このような複合的な要因で生まれた利用環境は、宝探しや探検の要素を観覧経験の中に加味することとなって、機器の推薦に従う観覧行動につながった一方、推薦には従わずに気になる資料を自由に見るといった観覧行動に向かわせる原因にもなったといえる。

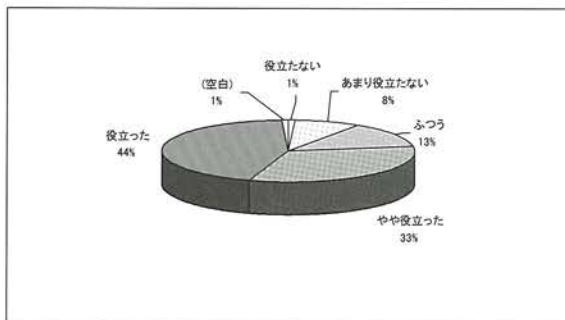
では、今後のハコ・ナビの改善の方向性は、利用者を機器の推薦に従うような観覧行動を促すように最適化することにあるのだろうか。本試行で明らかになった利用者の多様な鑑賞行動とその評価を踏まえるなら、その方向性は来館者が持つさまざまな興味関心に寄り添い、時にはそれを引き出しながら、各自の観覧行動を尊重するようなシステムとコンテンツ作りにあるといえそうだ。それはつまり推薦に

従いながら自身の鑑賞経験を重ねていくような利用方法がある一方で、推薦に従わずに自由な鑑賞を通じて自らの興味関心に気づき、展示と向き合うことにつながっていくような利用方法にも最適化されるということである。試行結果に見られるさまざまな利用の実態とハコ・ナビ全体への高い評価は、ハコ・ナビがこうした幅広い利用者のニーズに対応しながら、博物館や展示資料と利用者との間のコミュニケーションを促す媒体となり得るということを示していると考ええる。

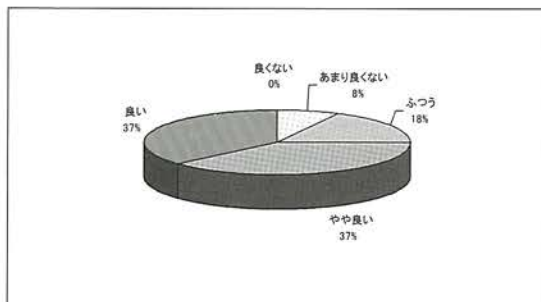
民博では、この試行結果を参考にして2006年10月からおよそ半年間にわたって開催される企画展「世界のおくりもの」展のなかでも、引き続きハコ・ナビの試行実験をおこなっている。利用者から指摘の多かった解説情報の充実や、地図の見やすさなどに改善を図るとともに、観覧履歴を自宅のパソコンからも閲覧できるようにサーバへの外部からのアクセス機能も加えた。この結果については、稿を改めて報告していきたい。

注1 ubiNEXTの研究開発の一部はATRが独立行政法人情報通信研究機構（NICT）の民間基盤技術研究促進制度「超高速知能ネットワーク社会に向けた新しいインタラクション・メディアの研究開発」により実施したものである。

注2 ゲーム端末を文化施設のガイド用に利用する例としては、『小倉百人一首』をテーマにした京都の時雨殿でニンテンドーDSを使ってカルタ取りや京都の名所を案内する「京都空中散歩」などのプログラムを楽しむことができる。また、東京のBunkamura ザ・ミュージアムで2006年11月に開幕した「スーパーエッシャー展」や同月に国立西洋美術館おこなわれた「ウェル・com美術館」でもニンテンドーDS Liteを利用した展示ガイドが導入されている。



グラフ6：展示理解への貢献度（アンケートより）



グラフ7：ハコ・ナビの全体的な評価（アンケートより）

参考文献

日高真吾・野林厚志編『みんなくキッズワールド：おとなとこどもをつなぐもの』、国立民族学博物館、2006年

「スミソニアン ジレンマについて —EXHIBITING DILEMMAS の著者インタビューを通して」

Smithsonian Research Associate
松本 栄寿

1. はじめに

[EXHIBITING DILEMMAS]¹⁾はスミソニアン協会（以下にスミソニアンと略）150周年に企画刊行された書である。筆者は同書を翻訳、『スミソニアンは何を展示してきたか』として刊行出版し、2004年にスミソニアン研究員として滞在したおりに、著者・編者にインタビューする機会にめぐまれた。ここでは主にインタビューを通してスミソニアンのジレンマを探った。

原書の主題「展示のジレンマ」、副題「スミソニアンの展示に関する問題」が示すように、この書は博物館のスタッフであるキュレーター、歴史家、展示専門家、エドゥケーターたちが博物館内で取組んだ展示と、そこで生ずるさまざまな課題に答えた内容である。

インタビューの対象者15名は、自然史博物館(NMNH, 設立1912)、アメリカ歴史博物館(NHAH, 設立1964)、航空宇宙博物館(NMAS, 設立1976)の専門家である。歴史をふり返ると、まずスミソニアンのジレンマはジェームス・スミソン(James Smithson, 1765-1829)の遺言「知識の増大と流布に寄与する組織をワシントンに創設する」と、遺贈50万ドルに対応する時から始まっていると言える。博物館にとって社会や環境の変化を耐えぬくには、常に新しい企画・展示が求められ担当者が遭遇するジレンマが生まれる。スミソニアンにとっては永遠にジレンマがつづくことになる。

また筆者は、この専門家の著書に基づいたインタビューが、スミソニアンの専門家の考えや博物館の背景を知る上で大変有効な手段であったことをあらためて認識した。

2. スミソニアンのかかえるジレンマとは

1846年に設立されたスミソニアンは、傘下に16の博物館と多数の研究機関をもつ総合組織である。美術館から航空宇宙博物館まで種別も運営も多様であり、また展示方法も各館は独立している。基本はスミソソンの遺言「知識の増大と流布に寄与する」にあるが、実際の運営は今日にいたるまでアメリカ社

会の動きに翻弄されてきたと言えよう。スミソニアンの長官も各博物館の館長も、研究者も実務者もさまざまな事態に遭遇し、多くの矛盾、ジレンマを解決してきたのが現在の姿であろう。

1) スミソニアンの発足自体が矛盾でありジレンマがある

スミソニアンの発足は、1835年のイギリス人ジェームス・スミソンの50万ドルの遺贈にあって、アメリカ国民の意志やアメリカ人のコレクションからスタートした訳でもない。設立に至る経緯を調べると、一度もアメリカを訪問したことのないスミソンの高額の遺贈に、アメリカ人の戸惑いと困惑さえ感じられる。

まず、どんな機関にするかについて長らく議論がつづき、議員の中には素性の知れない寄贈を受け取することに反対する者まであった²⁾。最終的に、政府の美術品、自然史コレクションの保管・展示・研究、国立図書館の機能をもつ機関として、議会の議決をへてようやくスミソニアンが発足したのは9年後の1846年である。同時に物理学者、ジョセフ・ヘンリー(Joseph Henry, 1797-1878)が初代長官に任命された³⁾。

2) 膨張するスミソニアンをどう支えるか

スミソニアンは150年の歴史の中で、支える財政源、運営にあたる人材、アメリカの多民族化にどう対応するか、環境の変化に悩んできた。

初代長官のジョセフ・ヘンリーは、19世紀前半の数少ないアメリカ人科学者としてヨーロッパから認められた人物である。彼は学術研究を好み博物館には興味を示さなかった。現代の博物館群の基礎ができるのは第二代ベアード長官(Spencer F. Baird, 在任 1878-1887)の努力である。その多くはワシントンDCのモール地区に集中している。

自然史博物館

アメリカ歴史博物館

航空宇宙博物館

アナスコスティア博物館

アフリカ美術館

フリーアギャラリー

サックラーギャラリー

ハーシュホーン美術館

ポートレートギャラリー

アメリカ美術館

レンウィック・ギャラリー

工芸産業館

郵便博物館

アメリカインディアン博物館
 関連機関にナショナルギャラリー
 ケネディセンター
 国立動物園
 天体物理学研究所 などがある。

現在のスミソニアンを支えるのは、従業員6,000人、ボランティア5,000人、予算600億円／年の大組織である⁴⁾。日常の運営にも、かつてスミソニアンにはさまざまな特権があった。例えば、スミソニアンからの郵便物はすべて無料であったし、それはヘンリー長官が実施していた学術文献の国際交換制度の費用にも適用されていた。また創業当時、アメリカ中のボランティアから電信で情報を収集して天気予報に取り組んだ際も、地方からの電信料は無償であったなどと、多くの間接的な優遇処置があった。

スミソニアン全体を管理する長官は、初代のヘンリー (Joseph Henry, 在任1846-1878) から、第9代のマコーミック (Robert MaCormick, 在任1984-1994) までは、すべて科学者が長官の任にあたってきたが、第10代は法律学者のヘイマン (Ira Heyman, 在任1994-1999)、第11代のスモール (Lawrence Small, 在任2000-) は元銀行家である。スモール長官は就任するとまもなく、スミソニアンの収藏品1億4,000万点のうち実際に使用されているのは2%にすぎないことと、その活用を繰り返さうたえている。ここにもスミソニアンをとりまく環境の変化と、ジレンマの一つを見ることができる⁵⁾。

3) 独立性をどう保つか

ときおり、改めて教育機関か宣伝機関かが問われることがある。1995年に原爆搭載機エノラゲイの展示が論争になったとき、ヘイマン長官は「我々を教育者より宣伝者と見ている者がある。スミソニアンは重要な独立した教育機関である。それなのにあたかも大学の教科書やカリキュラムを指示するかのように行動するものがある・・・」と暗に圧力のあったことを述べている⁶⁾。とくにエノラゲイ以来、かつてのスミソニアンの盤石のような地盤が傾いて、最近では政治的な圧力にカメレオンのごとく色が変わるとの声がある。以前は大統領が替われば、まず大統領がスミソニアンを訪問、挨拶した。ところが最近ではまず、スミソニアン長官が挨拶に出向く、これは変化を表す象徴かも知れない。

これまでのNation's Attic (国の宝物庫) から脱して、収藏品や展示の増加にともなう運営資金を政府以外に求めようとすると、資金提供者から展示の内

容に注文がつくことがしばしばある。どう調整をとるかはキュレーター達が日常直面するジレンマである。

4) 活動はアメリカに限定されるのか、国際的に活動するのか

かつて、スミソニアンは南北アメリカ大陸をはじめとして、アジア、アフリカ、大西洋、太平洋地域に探検隊を組織して多くのコレクションを収集した。それらは自然科学の研究をうながし、人類学の進歩に貢献して現在の自然史博物館、アメリカ歴史博物館、アメリカインディアン博物館などのコレクションにつながった。また、美術館は主に個人のコレクションの寄贈から出発しているが世界中の一流品が集中している。

航空宇宙博物館のコレクション、航空機・ロケットなどは、その豊富さ、貴重さからも羨望の的である。借用して展示したいとの申し込みは国内外の博物館から多数寄せられている。だが、アメリカ歴史博物館に見られる社会性・文化性に重きをおくストーリー展示は、諸外国で見ることにはまずない⁷⁾。また、現在スミソニアンの収藏品を活用すべくAffiliate (賛助会) プログラムが発足して貸出しを呼びかけているが、外国には及んでいない。

3. 『スミソニアンは何を展示してきたか』の内容

原書 [EXHIBITING DILEMMAS] は、展示のジレンマ (1-6) とキュレーターのジレンマ (7-12) に分かれていて、博物館の展示の実状と問題点を扱っている。ジレンマの主題は自然史博物館、アメリカ歴史博物館、航空宇宙博物館にわたっている。マコーミック長官は、「観客はスミソニアンは一つの博物館と想ってくるが、多くの博物館の集合体に出会う。博物館群に共通の方針をもたせるのは、多数の猫を一カ所に集めるようなもので、多様性こそアメリカの誇りであり長所である」と表現している⁸⁾。それらがこの原書からも読み取れる。内容を簡単に紹介しよう。

- 1: 「記憶の展示」 スティーヴ・ルーバー (Steven Lubar): さまざまな人達の第二次世界大戦にまつわる記憶について、戦争の最前線だけでなく、銃後の記憶の思い出の品々・音楽など記憶の共有をさぐる。
- 2: 「アメリカ西部展」 ウィリアム・トルットナー (William Truettner): 西部を描いた絵画の新しい解釈を二人のキュレーターを通して別な視点から取り上げる。

- 3:「ホープダイヤモンド」リチャード・カリン (Richard Kurin):呪われたストーリーがつきまとうブルーダイヤ。展示は自然史博物館か、あるいはアメリカ歴史博物館がふさわしいかを論ずる。
- 4:「民族誌的彫刻」メリー・アーノルディ (Mary Jo Arnoldi):19世紀末のイギリス人の制作になるアフリカ風のブロンズ像について、19世紀風の西欧人の歴史観展示と現代の解釈を問う。
- 5:「ライト兄弟の飛行機」トム・クラウチ (Tom Crouch):スミソニアンが認めなかった世界初の飛行機をめぐる、ライト兄弟とスミソニアンとの論争と結末までを物語る。
- 6:「水晶の頭蓋骨」ジェーン・ウォルシュ (Jane Walsh):にせものの価値、収集の是非を論ずる。メキシコインディアン製の作といわれた水晶の頭蓋骨の取り扱いと、博物館収集品の本質にふれる。
- 7:「ウルワースのカウンタ」ウィリアム・イエニングスト (William Yeingst)、ロニー・バンチ (Lonnie Bunch):人権運動の発端となった場所、ランチカウンタの収集と、展示にいたる経過と現代史の展示の意義を問う。
- 8:「バンカーの椅子」エレン・ヒューズ (Ellen Hughes):テレビ番組に登場する主人公の小道具を、スミソニアンに展示する試みと、博物館内部と来館者の意識の変化をとりあえる。
- 9:「ズーニーの彫像」ウィリアム・メルル (William Merrill)、リチャード・アルボーン (Richard Ahlborn):原住民インディアンへの返還が問題の彫刻。かつての欧米の価値観に基づくコレク

ションからの変化と、展示の取組をのべる。

- 10:「エスキモー展」ウィリアム・フィッツヒュー (William Fitzhugh):人類学の100年の研究とその展示について、19世紀の民族誌的展示から、原住民文化のありのままの展示への動きをキュレーターがどう取り組むかを分析した。
- 11:「昆虫園」サリー・ラブ (Sally Love):生きた生物を飼う展示。自然界の珍しい展示から、生物の多様性、地球環境を訴える展示へのキュレーターの意識の変革を説いた。
- 12:「デュークエリントン」ドワイト・バワーズ (Dwight Bowers):ジャズの王様のコレクションから舞台劇を復元演出した。歴史的資料とコレクションの生きた展示法を物語っている。

4. インタビューと対象者の反応

次に15人のインタビューの中から6名の意見をもとに、展示とジレンマの背景をまとめて見よう。いずれも第一線で活躍してきている人物である。

1) バンカーの椅子と「家族のすべて」

——エレン・ヒューズ (Ellen Roney Hughes, アメリカ歴史博物館文化部門歴史家)

アメリカ歴史博物館一階の奥の大型ショーケースの中に、なんの変哲もない二つの椅子が並べられている。この展示品が「バンカーの椅子」で、8年つづいたTVドラマ「家族のすべて」の主人公夫妻の座った椅子である。企画の段階から、骨董的な価値もない品をなぜ収集展示するのか、内部の無理解、観客のとまどいを乗り切って展示にこぎつけた。その後はアメリカ文化を代表する品々として、オズの魔法使いのジュディ・ガーランドのルビーの靴と続



図1: バンカーの椅子 (アメリカ歴史博物館)

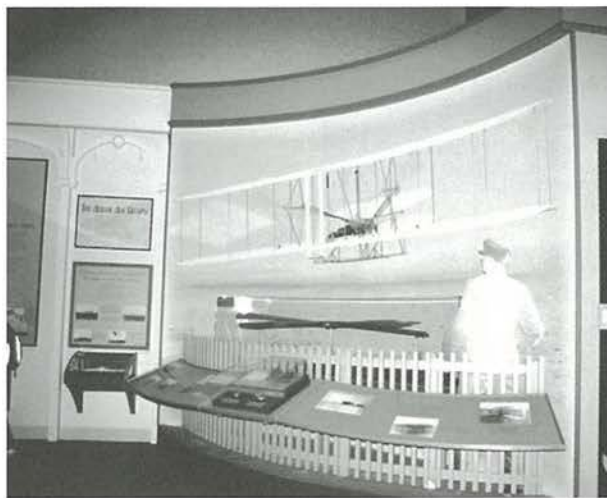


図2: ライト兄弟の展示 (モール地区 航空宇宙博物館)

くことになる。

この社会問題をテーマにしたテレビ放送「家族のすべて」には賛否両論があったし、展示計画には内部から反対もあったが、来館者の反応はそれを上回った。展示するとまず苦情が殺到したが、10年ほど後に展示を閉鎖すると、逆に「博物館は大衆文化を無視する」と市民から批判されるようになった経過がある。現代では観光ガイドが、博物館のハイライトとして「星条旗、ファーストレディの衣装、ルビーの靴、バンカーの椅子」と話すようになった。つまり国家の象徴・アメリカのアイコンとなったとも言えよう。

ヒューズによれば、アメリカ歴史博物館が「アメリカの大衆文化」に目を向けるようになったのは、「多民族国家」(A Nation of Nations, 1974)の展示からであった。それは展示が技術史から社会文化史へ移行する時期であったし、1970年代にかけては、市民運動やベトナム戦争などの人生経験を博物館の展示テーマにしようとの動きとなった。その結果がアメリカの移民の遺産を描いた「多民族国家」展に反映されたと言えよう。アメリカの娯楽(テレビ・ミュージカル・カントリーミュージックなど)とスポーツの展示がアメリカの文化史となったのである。

そのような文化史を見せようとする展示は、1994年の幕張メッセで行われたアメリカンフェスティバルの Smithsonian の移動展示に見ることができる。メッセの担当主哈ロルド・クロスター(Harold Closter)からは、「成功した『幕張展』は、今から考えると貿易問題で日米間が最も緊張した時であった。日米間の理解を深めるには、アメリカ文化の移動展示が最も良い企画であった」との感想を聞くこ

とができた。アメリカ人の生活の息づかいが聞こえるような展示は日本人にも好評であったと聞く。

2) ライト兄弟機の機体返還と訴訟問題

——トム・クラウチ(Tom D. Crouch, 航空宇宙博物館シニア・キュレーター)

航空宇宙博物館の中央にライト兄弟の飛行機が展示されている。人類のマイルストーンとしての位置づけである。しかし、日本人には意外であるが、1903年12月17日のライト兄弟の初飛行をスミソニアン長官が認めなかった。第三代ラングレー長官(Samuel Langley, 在任1887-1906)が飛行機の研究に打ち込んでいて、10日ほど前にポトマック川で行った彼の飛行機が失敗した背景がある。ライト兄弟機は「飛行した飛行機」だが、ラングレー機はそれ以前に「飛行することが出来る機」であったとの解釈である。双方の主張はお互いにゆずらず論争は長引いた。長い論争に失望したライト兄弟は、その機体をロンドン科学博物館に貸し出してしまう。機体がアメリカに返還されたのは、なんと第二次大戦後である。クラウチはその問題と背景から、機体の遺産相続人の対応に至る経緯を研究し、まとめあげている。

また、クラウチはかつてアメリカ歴史館のキュレーターであり、憲法200年記念の際に「第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容」展示をおこなった。強制収容が憲法違反であると判決が下された時のことである。1995年当時には、原爆搭載機エノラゲイ展示計画の主任であったクラウチに、その計画が強制収容の展示と同様に、日本人に好意的な内容であるとの非難が向けられた。最終的にエノラゲイの展示は、妥協策として注釈なしの機体のみの展示になったが、数々のジレンマを体験したクラウチ



図3:水晶の頭蓋骨(自然史博物館)



図4:アフリカン・ボイス(自然史博物館)

にひるんだ気配はうかがえない。なによりライト兄弟の研究家として自信をもっている。デスク横に山と積んだ著書がそれを物語っているし、どの階層の人物からも高い評価を受けている人物であろう。

3) 水晶の頭蓋骨

——ジェーン・ウォルシュ (Jane Maclaren Walsh, 自然史博物館人類学者)

筆者はインタビューの時はじめて水晶の頭蓋骨を見た。自然史博物館の奥深くウォルシュのデスク横の保管庫である。ウォルシュは水晶の頭蓋骨が1922年にスミソアンに匿名の郵便でとどけられた時から担当してきた。彼女はその発送主が分かるまでと、添付されていた手紙、それに頭蓋骨の出所を推定するまでの手順、その加工道具を同定して行く手法を語った。本物かにせ物か、にせ物であっても正規の収集品として扱い展示しても良いのか。ここにジレンマがある。

しかし、彼女は「それでも自分の研究意欲をそそり、科学的に解明してきた」と表現している。メキシコ原住民の制作と言われてきたが、作られた理由と用途とその要因を数十年にわたって地道な研究でつきとめた人物である。ウォルシュは毎日顕微鏡を覗いて、水晶のカットを調べる世俗を知らない姿に見える。展示は二の次であろうか、このような研究がスミソニアンの展示を支えているのか、自然史博物館の学術的な面を垣間見たインタビューであった。

4) 民族的彫刻とアフリカ

——メリー・アーノルディ (Mary Jo Arnoldi, 自然史博物館人類学部キュレーター)

原書に取り上げられている「民族誌的彫刻」のブロンズ像コレクションは、19世紀末にあるイギリス人がアフリカ大陸に滞在中に制作した彫刻である。原住民の姿を模したブロンズ像は、欧米人の視点から民族的誌彫刻と見なされ、アフリカを思わせる密林の風景、動物や武器とともに飾られていた。展示は未開人を文明人的な歴史観から眺めた構図であった。しかし、次第に20世紀の文明がアフリカ大陸の姿を変えだした。20世紀初めに確立したヨーロッパ的主観の博物館展示から脱却して、どうアフリカの姿を展示するか、アーノルディに与えられたテーマである。筆者がアーノルディに案内されたのは最新の展示「アフリカン・ボイス」である。

入口右手の大きな写真には、手前に土で固められた家屋、その先にコンクリートビルが雑然と並ぶ市街がある。ずっと先にはピラミッドが写っている。写真の左手には大型ビデオ画像がある。カメラは遠

くのピラミッドを映しズームアップしてくる。しだいに近づくカメラはピラミッド前の駱駝を捕まえる。さらに近づくとな人の遊牧民が乗っている。もっと近づく、なんと彼は携帯電話を手にもって話している。タイトル [This is Africa] の展示は、電話の発明者グラハム・ベルも想像しなかった光景だろう。筆者は思わず聞いた「この展示はどのようにして考えついたのですか」。アーノルディは「アフリカからワシントンに留学している学生を、プロジェクトチームに参加させるのよ」と素晴らしい企画と展示の手法を説明してくれた。

5) 編集者

——エミー・ヘンダーソン (Amy Hendreson, ポートレートギャラリー・歴史家)

編集者の一人である。現在のポートレート・ギャラリー (肖像博物館) に属している文化史研究者である。大変アクティブな性格に見えた。編集にあたっての苦労とテーマはどう選んだかとの私の質問に、彼女は「時の運よ、思いついたものをテーマにしたのよ」と気軽な答えが返ってきた。

もう一人の編集者、アドリエンヌ・ケプラー (Adrienne Kaeppler, 自然史博物館・海洋民族学者) によれば、「編集のキッカケはマテリアルカルチャ・フォーラムのディナーの話題から始まった」と思い出してくれた。彼女は人類学者であり、編集も企画も慎重にすすめる人物と見えた。原書はこのような性格の異なる二人の編集者によってまとめられた。

5. インタビューとスミソニアンの環境

初め工芸産業館 (Arts and Industry, 1881) にあった国立博物館から、現代の博物館群に大きく拡大したため、外部からみても内部からみても博物館群には共通点が乏しい。それを補おうと各博物館のキュレーターを中心に専門家研究会「マテリアルカルチャ・フォーラム」が定期的開催され、共通の話題を探っている。ここにはスミソニアンの全博物館、美術館から自然史や航空宇宙の専門家も、原書の著者・編集者も参加している。

1) インタビューの始め

インタビューにあたって、私の師バーナード・フィン博士 (Bernard Finn, アメリカ歴史博物館電気部門キュレーター) のアドバイスは、著者・編者に会った際に「この書は現在でも刊行できると思うか? をかならず質問せよ」であった。本書が企画されたのは原爆搭載機エノラゲイの展示をめぐって、スミ

ソニアンが大きく揺れる以前であったようである。この展示論争には、退役軍人を中心とする議会の一部から展示に注文がつけられ、予算削減の脅しであった。結局1995年に実施された「エノラゲイ」の展示では、注釈を付けずに機体を展示することで決着したが、ヘイマン長官と航空宇宙博物館ハーウィット館長 (Marttin Harwit、在任1987-1994) の辞任にいたる結果となった⁹⁾。とくに長官の任期10年の不文律が破られ、ヘイマン長官は約半分で終わっている。

それ以来、政治的な批判を受けるような企画や展示はさける傾向がみられる。出版物への影響はどうか、展示の当事者、キュレーターの意見を知りたいとのフィンの意向であった。

2) アメリカ歴史館創設のときの「電話の展示」

エノラゲイ展ほどの問題にはならなかったが、これまでも幾つかの展示の論争があった。

1964年、当時の技術歴史博物館にとって初めての展示クレームがあった。ベルの「電話」の展示である。電話の歴史をたどると激しい特許上の争いがあった。この展示では、ベル (Alexander Graham Bell) は電話の特許を1876年2月14日午前中に申請し、エリシャ・グレー (Elisha Gray) が午後申請したとされ、その技術的解釈と発明の同時性に言及していた。

しかしベル家から「本来の電話の発明者はベルだけである。グレーをとりあげた展示は歴史をねじまげている」との抗議文をつきつけられた。困窮した館長マルトーフ (Robert Multhauf、在任1966-1970) がSHOT (アメリカ技術史協会) の助けを得てようやく終結した。学会に調査と裁定を依頼した事件である¹⁰⁾。

3) 大型展示「サイエンス・イン・アメリカンライフ」

アメリカ歴史博物館に1994年に開設された大型展示「サイエンス・イン・アメリカンライフ」では、通常刊行される分厚いカタログ (日本式では図録) が日の目をみていない。

アメリカ化学協会の展示の一部をひきつぎ、基金の提供も受けた展示である。しかし、化学協会の進歩指向とスミソニアンのエクターナリスト展示があわず強力なクレームとなった。筆者が見てもレイチェルカーソン (Rachel Carson) と著書『沈黙の春』の展示などはよく取り上げたと思える。科学の奇跡と評価された殺虫剤 DDT が、害虫退治にとどまらず、やがては環境汚染や生物連鎖を引き起こしたこ

とに言及したものである¹¹⁾。当時の展示担当者によれば、ヘイマン長官から不評を買ったのも一因であった。

6. インタビューとスミソニアンの矛盾

現在でも、2004年の航空宇宙博物館別館の新設、2005年のアメリカインディアン博物館 (NMAI) のオープンにとどまらず、アフリカ系アメリカ人博物館 (NMAfA) の新設が発表されている。多民族国家としてのアメリカの政策にも関連するがスミソニアンはまだまだ拡張しつづけている。

1) インタビューと展示

フィン博士の課した宿題「いまでも企画出版できるか」への回答は賛否半々である。編集者ヘンダーソンは「出来る」、もう一人の編集者ケプラーは「フォーラム・ディナーの時の雰囲気がまだあるだろうか? 懐疑的」である。しかし、どの著者編者も自分の展示思想に主張と自信をもっている。逆にこのような多彩なスタッフを長官や館長以下の管理者がどうまとめて行くか、その苦勞が思い浮かんだ。

1964年に創立された現アメリカ歴史博物館は、構想から40年近くかかった。最初「国立技術歴史博物館」(MHT) と名のり世界の科学技術史センターを目指していたが、1980年に「アメリカ歴史博物館」と名称が変更された¹²⁾。またインターナリスト展示からエクターナリスト展示¹³⁾ への移行と平行して、強くアメリカの歴史を指向している。

アメリカ歴史博物館では、ヒューズの「大衆文化」や、クラウチの「第二次大戦日系人の展示」が生まれて、自然史博物館からはアーノルドの「アフリカンボイス」のように、ヨーロッパ人の視点から脱却した新しい展示ができた。新しい試みは必ずジレンマをとまう。展示はそれまでとは違った視点に基づくから、来館者からのクレームになったり、ある意味では世間の荒波にもまれる結果となる。

今回のインタビューから筆者の得た結論は「博物館は世俗を離れた僧院ではない、むしろ博物館は政治にもまれ、展示は社会を映す鏡 (プリズム)」であり、内外から押し寄せるジレンマを生きのびたのが現代の博物館である。展示を見れば、そのときの社会と時代が分かると言えよう。筆者の滞在したアメリカ歴史博物館でも、1964年当時の残されている展示と2004年の展示とは差があって、そこから当時の社会を読み取ることができる。

2) 博物館をめぐる環境

アメリカ歴史博物館が、よりアメリカ文化・アメ

リカの歴史を指向して、科学技術的な「モノ」の展示が少なくなって来ると、最近「アメリカ歴史博物館は科学技術博物館とはもう呼べない」などの意見がスミソニアン内部からでもでてくる。しかし、「モノ」だけをキャビネットの中に並べるにも説明のラベルが要る、技術と歴史的は不可分な領域もあり、背景を深く説明して行くとエクスターナリスト展示の方向に歩んでしまう。現在、アメリカ歴史博物館は建物の大改造中で、2006年秋から2年間全館休館である。2008年夏の新展示に一つの回答が見られるかも知れない。スミソニアンに「科学技術の博物館が別に必要か?」と、あらたなジレンマをかかえてしまった¹⁴⁾。かつて技術歴史博物館の設立に40年もかかったように、解決には長い年月を必要とするだろう。

私たちがスミソニアンを訪れたとき、表から見て矛盾を感じるのにどんなことがあるだろうか。まず博物館名に個人名称がついている。ついで展示入り口の寄贈者の文字である。

はじめに記したように、もともとスミソニアンの名称が、50万ドルの遺贈を残したイギリス人の名前である。また、美術館系はサックラーギャラリーをはじめ、幾つかの博物館はコレクションも建物にも寄贈者の名前がつけられている。2003年に開館した新航空宇宙博物館の建物には多額の寄贈者ウドバー・ヘーズイ (Udvar-Hazy) センターの名称がつけられている。また、アメリカ歴史博物館と自然史博物館がケネス・ベーリング (Kenneth E Behring) から多額の寄贈を受けるとともに、2003年にはアメリカ歴史館にベーリング・センターの名称を付記するにいたっている¹⁵⁾。しかし、名称についての違和感、抵抗はそう大きくない。問題は中身であろう。

代々のスミソニアン長官がその方針を述べる時には、必ずスミソンの遺言「知識の増大と流布に寄与する組織をワシントンに創設する」を引用する。神聖にしておかすべからざる言葉であるが、見方によってはスミソニアンのジレンマは、イギリス人スミソンの遺贈の時から始まっていると言える。

スミソニアンの発足当時にはコレクション自身が研究対象で、展示の研究はなかったと言われている。しかし、最近では観客を向いた試みが目立つ。例えば2006年7月に新改装なったアメリカ肖像美術館では、見学要望の多い修復室が通路から見えるよう工夫されている¹⁶⁾。自然史博物館の展示「哺乳類」(Mammal) も見やすさを主体とした展示である¹⁷⁾。

7. まとめ「インタビューは役立つか」

言い古された言葉に「現場の声を聞け」との言葉がある。博物館についても同じである。展示を担当したキュレーター、デザイナーには生の声がある。

1) インタビュー

今回のインタビューは、あらかじめ書かれた著書をもとにしているから、インタビューの内容が絞られ漫然とした対話より深く問題点をさぐれた。インタビュー専門家も、如何に相手を知って話を聞くかが勝負であると指摘している¹⁸⁾。その意味では原書を翻訳する際に多くの疑問点を調査した事が大変役だった。

1970年代から、アメリカ歴史博物館の展示がエクスターナリストのストーリー展示に変化して行くと、キュレーターたちは「モノ」それ自体から、社会的、政治的、倫理的、文化的、経済的、技術的断面などに幅広く直面せざるを得なくなった。彼らが直面する悩み、ジレンマが増えることになる。またできあがった展示は外部から批判をあびやすく、新たな論争を呼ぶことがある。また、これらの展示にはキュレーターの個性、フィロソフィーが大きな要因となると思われる。

通常私たちは展示を通して博物館を理解する。図録を見れば少し詳しく、担当したキュレーターや専門家に面会する機会があれば、質問を通して背景をかいま見ることができる。今回は訳書が縁でスミソニアンの第一線で活躍する15名に直接インタビューできた。ここからスミソニアンの背景が知れるし、多数の著者編者との対話・インタビューは他には代え難い手段であると実感した。

2) スミソニアンのジレンマ

創設当時の陳列展示から脱皮し、ストーリー展示へと取り組んで来たスミソニアンにはジレンマは永遠につきまとう。設立前にはじまった1829年のスミソンの遺贈金を受けとるかどうかのジレンマ、初代長官が当面した研究を志向するか博物館を志向するかジレンマ、博物館で研究と展示の二面をどう追求するかは現代にも共通する問題である。資金と社会の満足度をバランスさせるジレンマ、時代とともに要求される事項と現実との狭間を解決しながら現在のスミソニアンがある。

筆者はスミソニアンの研究員として1994年と2004年の二度にわたって滞在した。1994年の体験を書籍¹⁹⁾にまとめることができたが、当時は展示にあたったキュレーター達の苦悩までは思い至らなかった。しかし、2004年には10年の間に展示ばかりでなく、ス

ミソニアンをとりまく環境や、運営する組織も大きく変化つづけていることを感じ取れた。例えばアジア太平洋アメリカ人プログラムが生まれ、日本人スタッフが活動しているなどは2004年に初めて知った。ここでもスミソニアンはまだ拡張を続けている。

最後に、インタビューのアレンジに援助をいただいたフィン博士、インタビューの協力を得たボランティアの中山泰子、スタッフの実藤紀子、両氏に感謝する。

注および文献

- 1) 原本: Edited by Amy Henderson, Adrienne L. Kaeppler, "EXHIBITING DILEMMAS"
—Issues of Representation at the Smithsonian, Smithsonian Press, 1997
訳書: 松本栄寿・小浜清子(訳)『スミソニアンは何を展示してきたか』玉川大学出版部, 2003
- 2) Paul H. Oehser, "The Smithsonian Institution", Praeger Publication, 1970, pp.16-20
- 3) Paul 前掲, pp.26-27
- 4) たとえば2006年スミソニアン年報
- 5) Lawrence Small, Secretary, "Sharing the Wealth", Smithsonian, Jan.2002, p.10
- 6) Secretary Heyman's comments, "Smithsonian Perspective", Smithsonian, Oct. 1994, p. 9
- 7) 松本栄寿: 「科学技術博物館の展示思想とその見方」電気学会誌122-7, 2002, pp.432-436
- 8) Secretary Adam's comments, "Smithsonian Horizon", Smithsonian, May 1994, p. 8
- 9) 松本栄寿「スミソニアン国立航空宇宙博物館をめぐる論争—歴史的背景と展示の現状」、博物館学雑誌 Vol.21, No. 2, 1996, pp.35-54,
- 10) Robert Post, "A Very Special Relationship, SHOT and the Smithsonian Museum of History and Technology", T&C, July 2001, pp.401-435、および松本栄寿「スミソニアンにおける技術史研究の背景」成果をどう伝えたか、電気技術史研究会HEE-05-8, 2005, pp.39-43
- 11) 松本栄寿「スミソニアン協会の科学技術の展示」米国歴史博物館の歴史的背景と現状の活動を中心に、博物館学雑誌、Vol.20, No. 1-2, 1995, pp.40-57
- 12) Arthur P. Mollela, "The Museum That Might Have Been: The Smithsonian's National Museum of Engineering and Industry," Technology and Industry, Vol.32, 1991, pp.237-263
- 13) インターナリスト展示とは技術の歴史的な「モノ」を時系列か、発明の発達や進歩を追った展示を指し、エクスターナリスト展示とは「モノ」と社会とかかわり、文化面を追求するストーリー展示である。アメリカ歴史博物館は1964年の発足時から、アメリカ科学技術史学会(SHOT)とともに、エクスターナリスト・ストーリー展示を追求してきた。該当する日本語はまだない。
- 14) 高橋雄造「科学技術博物館とは何か」技術と文明, Vol. 2, No. 2, 1991, pp.23-41、世界の科学博物館の歴史とその存在意義を論じている。
- 15) Lawrence Small, Secretary, "Generosity and Standards", Smithsonian, July 2001, p.14
- 16) Arthur Lubow, "Speaking of Art", Smithsonian, July 2006, pp.48-55
- 17) Lawrence Small, Secretary, "New Hall on the Mall", Smithsonian, Nov 2003, p.14
- 18) 永江朗: 『話を聞く技術』、新潮社, 2005
- 19) 松本栄寿: 『遙かなるスミソニアン』、玉川大学出版部, 1997
- 20) この論文の経過を記す。筆者は『スミソニアンは何を展示してきたか』を翻訳後、さらに同好の士と2年間かけて読み合わせをおこない理解度を深めた。その集大成として、2006年8月にスミソニアンに6名のグループで訪問し、インタビュー対象者と再度面談をかさねた。参加者は主に玉川大学通信教育学部で学芸員資格を取得した社会人である。
また、JMMA基礎部門平成18年度第2回研究会、2006年10月に主題の骨子を発表する機会があり、それを機に論文にまとめた。翻訳にとりかかった2002年から5年を要した。



メリー・アーノルディ



エレン・ヒューズ



エミー・ヘンダーソン



ウィリアム・トルットナー



リチャード・アルボーン



ウィリアム・イエニングスト



ウィリアム・フィッツヒュー



ドワイトブロックーズ



リチャード・カリン



スティーヴ・ルーバー



サリー・ラブ



ジェーン・ウォルシュ



ウィリアム・メリル



トム・クラウチ



アドリエヌ・ケプラー

図5：インタビューした著者・編集者（15名）

ミュージアム・マネージメントと地域再生

早稲田大学大学院
藤澤 まどか

1. はじめに

本研究では、ミュージアム・マネージメントと地域再生の関わりについて考察することを目的とする。本年度から、指定管理者制度が本格的に導入されたが、指定の期間が設定されたことによって指定管理者が変更される可能性があるため、それに伴って活動方針や運営方法が変化することもあると考えられる。そのため、長期的な視点で目標設定を行うことが困難になる可能性が生じ、そのことによって活動基盤が不安定になる危険性がある。そのような中で、ミュージアム・マネージメントの基礎を再構築していくためには、ミュージアムを支援する協力体制を築くことが必要であり、来館者だけでなく施設が存在している地域との関連を考えることが1つの方策として挙げられるように思う¹⁾。

例えば、フィリップ・コトラー (Philip Kotler) とニール・コトラー (Niel Kotler) は、ミュージアムの存在意義を平等主義、民主主義、顧客思考の方向に再定義し、コレクションに比重が置かれていた状態から魅力的で忘れがたいミュージアム経験の提供へと移行していると指摘している²⁾。つまり、来館者に対する影響や質的側面がさらに重要になるため、ハード中心の組織観から環境に柔軟に対応できるようなソフト中心の組織観へと変容していくことが欠かせない³⁾。したがって、ミュージアム活動は、様々な要素との関わりを保持しながらも流動的に変化しつつ社会の中で存在していかなければならない。その意味でも、高安礼士がミュージアム・マネージメントの特徴として指摘するように、「資料と人」「博物館と社会」等の関係性に着目し⁴⁾、人や組織のネットワークに注目していくことが必要であろう。

本研究では、ミュージアムと他の分野との関係構築を前提としながら、地域との関わりに焦点をあててミュージアム・マネージメントの確立について考えたい。特に、ミュージアムと地域の関係を明らかにするとともに、ミュージアムが地域を蘇らせる中心的な拠点として機能し得ることに注目したい。そのことが、ミュージアムの支援体制を地域の中に確立する契機となり、活動を恒常的に維持していく根本的条件を生み出す要因になると考える。そのため、ミュージアムを単に展示会場としてとらえるのでは

なく、“自分たちのミュージアム”として認識されるためにも地域再生の関わりから考察していく。そのさいに、地域の中で閉鎖的に活動するのではなく、様々な人々へ開かれていくことを意識しながら多様な要素と交流することにも留意したい。

また、地域の制度的問題として自治体改革が進められており、地域マネージメントも変革の途中にあるが、財政等の問題からも自己資源を最大限に有効利用して新しい価値創造に向かわざるを得ない状態に置かれている⁵⁾。つまり、地域の問題とミュージアムの問題は密接に関わる側面があり、ミュージアム活動が地域づくりやまちづくりの起爆剤として機能することで現状を少しずつ変え得る可能性があると考ええる。このことから、ミュージアムは地域を支える重要な要素として地域の独自性やオリジナリティを創出し、地域が生まれ変わる契機をもたらすと思われる。つまり、地域の諸問題の解決の糸口としてミュージアムが寄与することになり、その結果、新たな価値を創造・継承していくことにもなる。このような観点から、ミュージアム・マネージメントの再構築を地域再生との関わりに留意しながら考えていきたい。

2. ミュージアム・マネージメントと地域の関わり

(1) ミュージアムとまちづくり

以上の観点から、ミュージアムは地域に関わることで様々な要素とつながっていき、地域の魅力や独創性が創出できると考える。特に、ミュージアムが地域づくりやまちづくりと関わることで該当地域の表情や景観を一新でき、地域に活力を与える誘因として作用することになる。

そこで、まちづくりとの関連を明らかにする前提として、ミュージアムが地域の中でどのような位置付けにあるのかについて考察したい。例えば、まちづくりの一環としてミュージアムを位置付けたものの中には、①地域全体の歴史や産業や文化の展示館、②その土地出身の芸術家や文学者等の記念館、③地場産業の団体や特定企業の博物館、④地域の旧家や個人のコレクター等、住民からの寄付によるもの、⑤必ずしも地域独自のテーマではないが、特定の分野に絞り込んだ個性豊かな博物館がある⁶⁾。したがって、ミュージアムをまちづくりに活かすとするれば、地域や産業と関わったり、あるいはその特徴に負けないほどのユニークなテーマを見出したりして、何らかのまちのオリジナリティを創出するような工夫が必要となる。さらには、ミュージアムと地域の架け橋になるような試みを行うことで、両者が相互に循環しながら新たな魅力を生み出せるようになる。

そして、ミュージアムを軸としてまちづくりを展開するためには、①地域のブランド価値、②地域ブランド産業、③地域ブランド成長戦略の3つの必要性が挙げられている⁷⁾。つまり、地域の特色を形成していくことがキーワードになるが、地域のオリジナリティやキャッチ・コピーをミュージアムから発信していくことに留意すべきであろう。これに関連して、文化・芸術活動についても作る側であれ観る側であれ、地域の多くの人のものになることで実を結び、“地元ゆかり”を起爆剤として地域の人たちの心に近づける必要が指摘されている⁸⁾。つまり、多様な人々に関われるような“開かれた活動”を行っていくことが重要であり、ミュージアムへの理解を促進するような試みも行っていかなければならない。そのさい、ミュージアム活動を通して地域の姿を検証したり、地域の特徴やアピールできる部分を省察したりすることによって、住民との間に親近感が生み出される手がかりとなる。その結果、地域住民が抵抗なく主体的に活動に参加できるようになり、その影響が地域全体にも波及していく端緒となる。このような過程を経ることで、住民自身のミュージアムに対する印象も変化し、ミュージアムから地域のイメージや方向性も打ち出していくことが可能になる。その結果、地域住民に対してアピールするだけでなく、地域以外の人々を呼び込む効果をもたらすことになるだろう。

上記のように、地域との関わりを保持しながら活動している事例として、ベネッセアートサイト直島・ベネッセハウスや地中美術館等のミュージアム活動が挙げられる。その中でも、「家プロジェクト」の活動では、住民が展示作品の管理を行うことがあるが、この活動に参加することで作品へ愛着を感じたり、既存の意識を変化させたりすることがある⁹⁾。このように、ミュージアム活動を継続して行っていくためには、住民の協力や理解を得ることが欠かせず¹⁰⁾、住民を巻き込みながら活動を行っていくことで人と人との触れ合いが生まれ、ミュージアムだけでは創出できないような魅力が紡ぎ出されることになる。さらに、開館10周年記念企画展「スタンダード展」では、ミュージアム以外の直島島内の様々な家や施設や路地に作品が展示され、直島の歴史や文化を現代の視点から生き返らせたり¹¹⁾、2006年10月7日から開催されている「Naoshima Standard 2」では「芸術の日常化」に取り組んだりしている¹²⁾。このように、ミュージアム活動によってまちの雰囲気や表情が変化し、相互に響き合いながら新たな価値を創出して、地域づくりやまちづくりの拠点として機能していることが読み取れる。

(2) ミュージアム・アイデンティティと地域の魅力
前述のように、ミュージアムがまちづくりと関わるには地域の特性を生み出すことがキーワードになるが、この特性はミュージアム自体の特徴にもなり得ると言える。その意味では、ミュージアムと地域の魅力がつながることで相乗効果をもたらすことになる。このように、地域の特性と関わりながら各館の独自性を表明しつつ活動を行うことで、自らのオリジナリティを自己認識することにもなる。その結果、ミュージアム・アイデンティティを構築していくことになり、ミュージアムの社会貢献の内容やオリジナリティを明確にしていく手立てになる。例えば、前述のフィリップ・コトラーとニール・コトラーによれば、ミュージアム固有のアイデンティティを定着させる手段の1つとしてミュージアム・ポジショニング戦略が提示されている。その内容は3点あり、①ミュージアムの特徴や特性の一部を使用して自館を表現する「特性によるポジショニング」、②来館者に提供する便益を表わすことで自館を表現する「便益によるポジショニング」、③主な利用者、来館者、会員によって自館を表現する「利用者によるポジショニング」が挙げられている¹³⁾。したがって、ミュージアムのアイデンティティを明確にすることは、来館者や社会にむけて存在意義や役割をアピールしていく根拠を確立することにもなる。このようなポジショニングに関しても、地域との連関で考えることでより広い資源を発掘していくことができる。

そのさいに重要な視点となる地域固有の文化も、従来のように「伝統文化、芸術、ファッション」等の体系付けられたものから、その範囲を広げて「人々のライフスタイル、価値観、思考、感受性」までも包括するようになっていく¹⁴⁾。そのため、住民の日常生活、感受性や感覚に訴えかけるような活動を行うことで地域固有の文化も活性化していくことになる。つまり、地域とミュージアムが相互に影響を与えながら、新たな価値や目標を創出していく可能性が多いに秘められていると言える。

また、地域について考えた場合、それぞれに固有の課題が存在すると思われるが、地方都市の再生に関しては、それぞれ固有の自然環境や歴史・文化環境等の環境資源を丹念に掘り起こし、保全・整備することで地域環境の質と独自性を高めていくことがある¹⁵⁾。そこで、ミュージアム等の文化施設を中心に地域の現状を丁寧に検証したり、歴史的なものを現代にうまく活用したりすることで地域の魅力も顕在化していくことになる。このように、地域に固有の歴史や文化を活用していくことで、地域自体の特色が生み出されるだけでなく、ミュージアムを中心

に地域が再生され、その活動拠点として機能していくことになる。したがって、地域を変えていく原動力を秘めていると同時に、“ハコ”としての施設ではなく地域や社会に積極的に働きかけられるようになり、ソフト面の充実にも結びついていく。

3. ミュージアムと歴史的要素の活用

以上のことから、地域の文化や歴史的要素を活用することでミュージアムに親近感を持ったり、ミュージアムの独自性や新たな価値観を創出したりすると理解できるが、ミュージアムの歴史的要素は作品や資料に加えて建築物そのものが該当する場合も多い。このように歴史的建造物として指定された建物を活用しているケースは東京国立博物館本館や京都国立博物館本館等にも当てはまることであり、ミュージアム以外の機能を持っていた施設を利用した例としては旧発電所を利用したテート・モダンや、小学校校舎を改築利用したP. S. 1 コンテンポラリー・アート・センター (MoMA)、旧朝香宮邸を活用した東京都庭園美術館等もある。上記のような歴史的要素を活用することで、場所の記憶や歴史をとどめながら独特の雰囲気を醸し出すことになる。これがミュージアムの独自性になるとともに周辺地域のイメージ形成に影響をもたらしていく。そのため、ミュージアムの歴史的要素が地域の中でどのような影響を与えているのかについて、実際の活動と照らし合わせて考えてみたい。

(1) 三井記念美術館

日本橋地区にある三井記念美術館は、1998年12月25日に国の重要文化財に指定された三井本館を活用し¹⁶⁾、歴史的建造物を施設として利用しながら活動を行っている。同美術館は、三井文庫別館が日本橋三井タワーの竣工とともに、三井家及び三井グループに縁の深い日本橋へと移転したことを契機に2005年10月8日に開館した¹⁷⁾。さらに、日本橋地区では名橋「日本橋」保存会が発足して周辺観光の美化・保存に取り組んだり、日本橋地区都市再生事業によって道路の整備も行われたりしている¹⁸⁾。このように地域全体で保存や地域再生に取り組んでいるが、都市開発の拠点にはコレド日本橋の建設を皮切りに、第二弾として日本橋三井タワーが位置付けられている。そのため、日本橋三井タワーの建設にあたっては、都市開発と並行しながら、歴史的要素を保存していくことになった。具体的には、単なるファザード保存ではなく三井本館の全面保存を行い、使いながら保存する「動態保存」を選択して歴史的建造物の価値を最大限に発揮する方針となった¹⁹⁾。したが

って、当時の現状をそのまま維持するスタイルではなく、東京都特定街区制度による容積率や高さ制限等の緩和を活用し²⁰⁾、古い建築物を活かしつつ新しい建築物と共存させる方法で保存を行っている。つまり、まちに新旧両方の魅力が生み出されていくことになり、次世代に古き良きものを伝えながら新たな価値を創造する拠点としてミュージアムが位置付けられている。このようなことから、建物の魅力と街区全体を視野に入れた都市内の歴史的建造物の将来を考えるうえでのモデル的な存在としてとらえられている²¹⁾。



写真1 三井記念美術館
(写真提供：三井記念美術館)

上記のように歴史的建造物をミュージアムとして利用し、地域の他の店舗や企業と協力しながら地域全体でまちづくりに取り組んでいるが、ここで大切なのは、「点」としての開発を複数つないでいくことで「線」に変え、地元である日本橋エリア全体に広げて「面」として考えることである²²⁾。その活動を点から面へと広がりを持たせるにあたって、ミュージアムがシンボリックな役割を果たし、まちづくりの重要なポイントになっていると言える。さらに、日本橋三井タワーの設計を行ったシーザー・ペリ アンド アソシエイツ ジャパン (Cesar Pelli & Associates Japan, Inc.) の光井純は、「街から建築を考える・歴史と響きあう・時間を越えた協働の価値を捉える」という3つの視点を提示しており²³⁾、建築的な面からもまちづくりや歴史との関わりが強調されることとなった。

また、同美術館の展示室に関しては、洋風の空間のなかで日本と東洋の古い美術作品を見られることから「調和と対比」の感得が指摘されているが²⁴⁾、

様々な要素が複合的に混ざり合い、お互いに個性を発揮することによって今までにない斬新な発想も生み出されていくことになる。このようなことは、同美術館展覧会「美術の遊びとこころ 美術のなかの写」(2006.7.11-9.3)に代表されるように先人の業や美意識を継承しつつ、新たな創造に注目する姿勢にも反映されている。その結果、「古き良きものを保存して未来へとつなぐ²⁵⁾」視点も自然に生じ、その姿勢が地域全体にまで波及していく契機になる。

(2) アサヒビール大山崎山荘美術館 (以下、大山崎山荘美術館)

次に、前述の三井記念美術館と同様に歴史的建造物を活用しながら活動を行っている大山崎山荘美術館についても注目したい。同美術館本館は2004年に登録有形文化財として認可されているが²⁶⁾、もともと大阪の実業家である加賀正太郎の個人の山荘として、イギリスのチューダー様式を基本としながら加賀本人が設計を行ったものである。

1989年には山荘を取り壊してマンションの建設が予定されたが、地元住民を中心に反対運動が起こり、それが近隣市町にまで広がっていった。これに加えて、京都府からの働きかけもあったことからアサヒビールと京都府との共同購入によって美術館として1996年4月7日に開館した²⁷⁾。同美術館の収蔵品は、アサヒビール初代社長である山本爲三郎のコレクション約1,000点を中心に構成されている。山本は民藝運動に深い理解をもっていたことから、河井寛次郎や濱田庄司やバーナード・リーチ (Bernard Leach) 等の作品が所蔵されている。これらのコレクションに通底する“生活に即した用と結びついた美”を受け継いで²⁸⁾、現代の視点から「用の美」を中心に据えた企画展を定期的に行っている²⁹⁾。また、加賀はイギリス王立のキュー・ガーデンの洋蘭栽培に感銘を受け、1914年から山荘裏手に温室を設けて蘭栽培を始めたが³⁰⁾、現在でも館内に蘭が飾られているところもあり、加賀の想いが現在も受け継がれている。このように、美術館の過去と現在をつなぐ要素を活かしながら、ミュージアム活動を行っていることが特徴である。

そして、新館は安藤忠雄が設計しているが、四季折々の表情が美しいことから、単なる美術館としてだけではなく庭園を中心とした「環境美術館」として設計が行われた³¹⁾。そのことば通り、10年経った現在では新館の表面が緑に覆われて庭園との境目が分からないほど周囲に溶け込んでいる。また、前述の庭園は天王山を借景としており、周辺環境との調和や対比が見所となっている。そのため、周囲の豊

かな自然環境によって、都市にはない静けさや四季の移ろいを感じられるようなゆとりの時間を過ごすことができる。



写真 2 アサヒビール大山崎山荘美術館本館
(撮影：筆者)

このようにミュージアムの建築物を通して、歴史的要素を取り入れたり、周囲の環境を保全したりすることにも寄与していることが理解できる。同美術館の建設にあたっては自然環境に変化をもたらさないよう配慮されたが、この施設ができたことでまちの拠点として盛り上がりを見せるようになった³²⁾。つまり、ミュージアムの建設をきっかけに地域が変わっていくだけでなく、住民自身が地域の特色の柱として認識する契機となった。そのため、ミュージアムの建築物から感じる歴史性ととともに、ミュージアムを支える人々のネットワークも重要な視点となる。つまり、歴史的要素の保存によって地域の文化を継承しつつ、人々の支援のネットワークが形成されていく。このように、ミュージアムのコンセプトを担うような土台があることで、制限となる場合もあるにせよ豊かな活動を行っていく基礎となっていく。したがって、歴史的要素を現在に受け継ぐことで、ミュージアムの独自性や支援体制を確立していく大切な要素になると理解できる。

4. ミュージアムの歴史的要素と創造性

上記のことから、歴史的要素を取り入れることでミュージアムの独自性やオリジナリティを明確にすることが読み取れるが、換言すれば、過去を現代に保存することで新たな魅力を創出することになる。そのさいに、歴史的要素をいかに活用し、意味を持たせるのかという現代の視点からの読み解きが欠かせない。そのため、過去は絶えず再現されるという意味でもまさに現在であり³³⁾、過去は息吹を与えられて創造性の源として機能することになる。それは、

作品の制作に関しても当てはまることであり、「伝統を形成する契機としての歴史的イベントは、作品といふ形で、過去と現在とを直結してある³⁴⁾」のである。特に、前述の事例からは歴史的建造物を活用しながら地域再生に寄与していることが読み取れるが、ミュージアムの建築物そのものが歴史的資料として活かせるだけでなく、周辺地域のまちのイメージを形成する中心的存在として位置付けられていると言える。

さらに、歴史的建造物の保存に関しては文化的価値と経済的価値との両立が問題になるが³⁵⁾、双方のバランスを考慮するだけでなく歴史的要素の重要性をどのようにとらえるのかについて考える必要がある。ここで、地域再生の観点から考えた場合、地域づくりやまちづくりと関わることになるが、都市は人々の記憶、過去、また文化的シンボルの貯蔵庫であり、建築家によって意図されたものではないにせよ、そのような記憶は建造物に定着している³⁶⁾。つまり、意図するにせよ、しないにせよ建造物を介して記憶や過去や文化が伝承されていくことになる。そのため、ある一定の場所で活動を行っているミュージアムの建築物に関しても地域の文化や歴史が刻まれていることになり、日本橋地区のように地域やまちのシンボルとして機能するとともに、住民や来館者のアイデンティティや記憶をかたちづくる契機として重要な位置を占めることになる。この場所と記憶の問題については、キケロ (Marcus Tullius Cicero) によっても示唆されていたが³⁷⁾、人々のイメージと深く関与する事柄であり、人間存在の根拠としても看過できない³⁸⁾。それは、歴史を眺めることで現在を知り、人間自身の所在を明らかにするため³⁹⁾、歴史的要素は個人の同一性の根拠となるだけでなく、社会的記憶までも含むからである。

したがって、ミュージアムの歴史的要素に関しても、人々のアイデンティティを支えるものとして、また社会的記憶を保持する機能を持つことが理解できる。その意味では、ミュージアムを中心に地域のイメージを生み出したり、住民や来館者の価値観を形成したりすることにも関わると考えられる。換言すれば、ミュージアムの特徴を明確にするだけでなく、ミュージアムを支える人々にも変化を与え、それが地域にも反映されていく。このような活動は教育作用にも当てはまり、単に社会構造を遺産として引き受けるだけでなく、文化的伝承との取り組みも必要不可欠であることから⁴⁰⁾、文化的側面をどのように解釈するのかということについても考えなければならない。その一方で、イメージの固定化が問題になるが⁴¹⁾、それを打破していくには歴史的要素を伝承して保存するだけにとどまらず、それを豊かな土

台にして未来へとつなげていく創造性に着目することが肝要である。したがって、伝承・保存に関しては、現在の観点から新たな要素が入り込むことにも留意すべきであろう。

特に、ミュージアムは具体的な建造物を伴って運営されていることが多く、制度体としての施設の活動は一定期間の中でパターンの定着しがちであり、それが積み重なることで住民の施設経験は固定化され、施設と住民の固有の関係をかたちづくることが指摘されている⁴²⁾。したがって、ミュージアムを頻繁に利用して身近に感じる人はそれを固定化しながら強化していき、逆にミュージアムを敬遠して疎遠に感じる人はそれを定着させていく。つまり、施設に対するイメージと来館者のミュージアムへの近付きやすさは相関関係があるため、固定化されたイメージから開かれたものとして認識されるように取り組んでいかなければならない。その開かれたイメージの実現に関して、過去を伝承するだけでなく多様な要素と関わり合いながら、新たな価値を創造しつつ建造物やコレクションを活かすことが重要であろう。社会教育法第3条第1項では「すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら實際生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成する」ことが定められているが、創造的に開かれた活動を行っていくことによって様々な人々が利用できるような公共性も実現できると思われる。その結果、ミュージアムの社会的意義や教育的作用についても既存のものに固定することなく新たな側面が見出されていくことになり、ミュージアムを取り巻く地域に関してもこれまでとは違う観点から把握できるようになる。

5. 人の流れを生み出す視点

以上のことを受け、ミュージアムと地域再生の視点から考えると、歴史的要素を伝えつつ創造的に活動することで、まちのイメージを新たにしていくことが読み取れる。特に、地域再生に関しては該当地域の開発される街区や建物のデザインによって、人々やテナント等と呼ばしめるような価値を空間に付与し、人の流れを生み出していくことがキーワードになる⁴³⁾。したがって、まちのイメージを変えていく契機の1つとしてミュージアムの建設が据えられるが、建築物やデザインを活用することも魅力を創出する手がかりになる。そのため、ミュージアムのコンセプトや歴史性が反映された建築物や所蔵品を丁寧に掘り起こすことで、ミュージアムの特徴やアピールできる要素を確立していく手がかりになる。前述の事例に関しても、歴史的建造物や所蔵品、周囲

の自然環境を活かしながらミュージアムの新たな魅力を発掘して人々を呼び込んだり、クリエイティブな活動を行ったりしている。つまり、伝統文化にせよ芸術分野にせよ、市民レベルから隔離され権威化されている状態（「文化のタブロー主義」）が問題であるため⁴⁴⁾、ミュージアムに関しても閉鎖性を打破していくような姿勢が必要であろう。そのさいに、都市は住民だけのものではなく、広い意味での来訪者であるビジターをも内包する視点も忘れてはならず⁴⁵⁾、ミュージアムと周辺地域の住民、商店、自然環境等の関係を視野に入れて幅広く考えていかなければならない。

そこで、ミュージアムの開館によって地域がどのように変化したのかについても述べてみたい。例えば、ベネッセアートサイト直島・地中美術館の効果としては、直島への観光客は2003年には59,000人、2004年には106,000人、2005年には169,000人に急増している。また、2004年・2005年の入館者は98,000人で、観光客数の35.7%を占めており、来島者の3人に1人が美術館を訪れているという結果であった。さらに、経済効果に関しては、入館者の飲食・宿泊・交通・土産に関する直接効果が3,410,000,000円、原材料やエネルギー消費、所得増に伴う島民らの消費拡大等の間接効果は2,170,000,000円となった⁴⁶⁾。したがって、ミュージアムが経済効果を生み出すことに加えて、まちの知名度の向上に寄与することが読み取れる。

しかしながら、ここで重要なのは、単に地域以外の人々が流入したということではなく、ミュージアム活動が住民の理解・参加・協力を得ながら、地に足をつけて地域とともに活動を行っていったということである。このような例に、新潟県の越後妻有アートトリエンナーレのようなアートプロジェクトがあるが、地域を巻き込むことで成功に導かれるとともに、越後妻有地域（十日町市・津南町）もアートを触媒にして全国的に広まっていくことになった。つまり、ここで意識しなければならないのは、ジョンH.フォーク（John H. Folk）らが述べるように単に入場者数が増加することを目指すのではなく、活動内容の質的充実を看過しないということである⁴⁷⁾。というのは、以前に訪れたことのある施設にもう一度足を運びたいと思うには、その時の体験が満足できるものであったり、人々を惹きつける魅力や要求を満たすだけの質的レベルが保障されたりしていることが欠かせない。つまり、その質的内容はミュージアムでの体験に加えて、ミュージアムが立地している周辺地域の印象や雰囲気も含まれるため、地域全体で魅力の向上に取り組むことがリピーターの獲得

にも結び付いていく。

以上のことから、ミュージアム活動と地域づくりやまちづくりの成功に関して通底することは、他のミュージアムやまちにはないような独創性や差異化が求められ、そこを訪れる人の流れを生み出すことである。換言すれば、ミュージアムや地域の魅力をどのように発見し、包括的に実現していくかにかかっている。そのため、リピーターやビジターをも視野に入れながらその魅力を保ちつつ、絶えず更新していくことが必要であろう。

6. おわりに

これまでの考察の中で、ミュージアム・マネジメントと地域再生の関わりについて、以下の3点が見出されるように思う。

第1に、歴史的要素の活用によって、ミュージアムの独自性が確立されるだけでなく、まちづくりに欠かせないオリジナリティの創出にも寄与していくことになる。特に、三井記念美術館のようにミュージアムがまちづくりの拠点の1つとして機能している場合、歴史的建造物を活用しながら地域の独自性やイメージが定着していくことになる。このように、まち全体で取り組むことで、活動自体が成功に導かれると思われるが、独り勝ちしないという姿勢で地域全体の潤いにまで目を向けることが重要である。このような姿勢を持つことで、ミュージアムの活動が豊かなものになるだけでなく、地域全体が活性化していくことになり良い循環をもたらしていく。

第2に、地域住民に“自分たちのミュージアム”として認識される契機が含まれていることから、ミュージアムの支援体制の確立に結び付くということである。特に、大山崎山荘美術館本館の保存活動を通して住民の意識が変容し、その気運が盛り上がることで、自分たちの施設として意識する契機となったが、ミュージアム活動を継続していくうえで欠かすことのできない住民の参加や理解を得る絶好の機会になるとも言えよう。その一方、住民だけに注目するのではなく、ビジターも視野に入れながら開かれた活動を行い、公共性を保持することにも留意することが必要であろう。

第3に、ミュージアムが立地している地域そのものの表情を生み出すとともに、人の流れを活性化させる重要な拠点として機能することである。つまり、地域の経済効果を生み出すとともに、地域の内外が交流していくことになる。このようなコミュニケーションが行われていくことで、ミュージアムのアイデンティティが明確になり、地域のイメージも更新しつつ新たな魅力が継続して出現することになる。

その結果、1 回限りの来館から何度も訪れたいくなるような深みのある魅力が徐々に形成されて、リピーターの獲得につながっていく。このようなことから、ミュージアムと地域が相互に新たな活動や創造的な試みに向かえるようになり、活動内容も充実したものになっていく。

ミュージアム・マネージメントには、経済的な運営が重要なポイントになるが、ミュージアムを利用する来館者や地域住民の理解や参加がなければ活動内容が豊かになっていくとは言いがたい。したがって、ミュージアム・マネージメントに地域再生の観点を入れることで、地域住民にとって親しみが持てるようになり、ミュージアムへの支援ネットワークも形成されていく。また、地域そのものが活力を取り戻し、その活力がミュージアム活動にも反映されて良い循環が生み出される。その結果、指定管理者の変更によっても揺るがないようなミュージアムの独自性や支援体制が確立されていくことになり、活動も継続性を持って行えるようになる。このように、ミュージアムと地域の関連を取り入れつつ、幅広い視点で考えることによってミュージアムの活動内容もさらに充実していくのではないだろうか。

【注】

- 1) 本研究では、ミュージアムの表記に関して、高安礼士が述べるように博物館がその機能と活動分野を拡大し、博物館経営から得られた成果を文化遺産として保存・活用して観光事業や地域おこし、娯楽活動や学校教育にまで応用する場合に表記することとする。(高安礼士『『創発型』マネージメントの提案—ミュージアム数理論の確立に向けて—』『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』No. 9、日本ミュージアム・マネージメント学会、2005年、pp.3-4。)
- 2) Philip Kotler & Neil Kotler、井関利明・石田和晴訳『ミュージアム・マーケティング』第一法規、2006年、p.21。
- 3) 塚原正彦「ミュージアム組織マネージメント」大堀哲他編『ミュージアム・マネージメント 博物館運営の方法と実践』東京堂出版、1996年、pp.117-119。
- 4) 前掲、『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』No. 9、pp. 5-8。
- 5) 新川達郎「地方自治体再編とコミュニティ再生」財団法人東北開発研究センター監修、山田晴義・新川達郎編『コミュニティ再生と地方自治体再編』ぎょうせい、2005年、p.20。
- 6) 角野幸博「まちづくりと文化施設」大堀哲也他編『ミュージアム・マネージメント 博物館運営の方法と実践』東京堂出版、1996年、pp.33-34。

- 7) 塚原正彦「まちづくりと博物館」大堀哲編『博物館概論』学文社、2005年、pp.148-150。
- 8) 岡本包治「生涯学習と地域に根づく文化・芸術」岡本包治編『まちづくりと文化・芸術の振興』ぎょうせい、1992年、pp. 3-4。
- 9) 藤澤まどか「ミュージアム・マネージメントの確立と地域づくりに関する一考察」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』No.10、日本ミュージアム・マネージメント学会、2006年、pp.55-57。
- 10) 「美術館の在り方議論」『四国新聞』2006. 6. 16、12面。
- 11) 秋元雄史「Traveling—直島・愛そして—」秋元雄史・逸見陽子編『The Standard』直島コンテンポラリーアートミュージアム、2002年、p.214。
- 12) 秋元雄史「直島という場はテーマであり、作品は場のピークである」ベネッセアートサイト直島ホームページ、<http://210.159.75.166/xoops2/standard/concept.pdf>、2007. 2. 16閲覧。
- 13) 前掲、『ミュージアム・マーケティング』p.187。
- 14) 橋爪紳也「ツーリストシティ研究の可能性」橋爪紳也・田中貴子編『ツーリズムの文化研究』京都精華大学研究所、2001年、p.84。
- 15) 福島茂「地方都市の再生」大西隆他編『都市再生のデザイン 快適・安全の空間形成』有斐閣、2003年、p.62。
- 16) 文化庁ホームページ、<http://www.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>、2006. 9. 13閲覧。
- 17) 三井本館の設計はニューヨークのトロウブリッジ・アンド・リビングストン事務所 (Trowbridge & Livingston)、施工はジェームス・スチュアート会社 (James Stewart & Co.) が担当し、アメリカンボザール様式を採用している。設計発注時に三井合名会社理事長團琢磨から出されたデザインのポイントとしては、「Granduer, Dignity, Simplicity」の3点がある。(石田繁之介『三井本館と建築生産の近代化』鹿島出版会、1988年、p.59。及び、故園男爵伝記編纂委員会『男爵團琢磨傳』下巻、故園男爵伝記編纂委員会、1928年、p.146。及び、鈴木博之「三井本館の歴史的意義」三井本館記念誌編纂委員会編『三井本館』第1巻、三井不動産株式会社、1989年、pp.27-51。)
- 18) 国土交通省東京国道事務所「人と都市の起源 日本橋四百年紀」パンフレット参照。及び、国土交通省関東地方整備局東京国道事務所「日本橋地区都市再生事業」パンフレット参照。
- 19) 小林進治・黒木正郎・光井純「歴史の継承と都市の再生」『新建築』Vol.81 No. 1、新建築社、2006年、p.138。
- 20) 東京都都市整備局ホームページ、「東京都特定街区運用規準」2006年 4 月、<http://www.toshiseibi>。

- metro.tokyo.jp/seisaku/new_ctiy/tokugai_unyo.pdf、2006.8.5 閲覧。これについて、東京都制定「新しい都市づくりのための都市開発諸制度活用方針」によると、日本橋地区は「文化・交流、商業、生活支援、産業支援」の促進が示されており、「文化・交流」に関する具体的施設の例示には「会議施設、ホール、文化施設、宿泊施設、公開を目的とした施設、教育施設、スポーツクラブ、常時一般に開放される建築物の部分」が挙げられている。さらに「文化施設」に関しては、「劇場、美術館、図書館、歴史的建造物等保全、活用施設、その他これらに類するもの」とされ、この点から歴史的建造物を美術館として活用する方針に向かう1つの要因になったと思われる。(東京都都市整備局ホームページ、「新しい都市づくりのための都市開発諸制度活用方針」2006年4月、http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/seisaku/new_ctiy/index.html、2006.8.5 閲覧。)
- 21) 鈴木博之『日本における近代建築保存の理論的研究』(平成10年度～平成11年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(2))研究成果報告書)、2001年、p.16。また、「日本橋再生計画」(“残しながら、蘇らせながら、創っていく”日本橋の街づくり)は、「新日本様式」100選の「粋(ふるまいのこころ)」の部門の1つとして選ばれている。(『新日本様式』100選)パンフレット参照。)
 - 22) 前掲、「歴史の継承と都市の再生」『新建築』Vol.81 No.1、新建築社、2006年、p.138。
 - 23) 同前、p.139。
 - 24) 清水眞澄「江戸商人の伝統をいまに伝え、未来に貢献する」『Cultivate』No.26 (Winter Issue)、文化環境研究所、2005年、p.38。
 - 25) 三井記念美術館運営部長・天野吉雄、インタビュー、2006.6.21。
 - 26) 同美術館本館に加えて、椽の木茶屋、彩月庵(茶室)、大山崎山荘環・洞(トンネル)、大山崎山荘栖霞楼(物見塔)、大山崎山荘旧車庫(京都府休憩所)が登録有形文化財に指定されている。(文化庁ホームページ、<http://www.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>、2006.9.13閲覧。)
 - 27) アサヒビール大山崎山荘美術館「アサヒビール大山崎山荘美術館について」『アサヒビール大山崎山荘美術館』アサヒビール大山崎山荘美術館、2006年、pp.11-13。及び、中山禎輝「蘭花譜のふるさと 大山崎山荘と加賀正太郎」加賀正太郎『蘭花譜 天王山 大山崎山荘』同朋社出版、1995年、pp.10-103。
 - 28) 柳宗悦『柳宗悦全集』第8巻、筑摩書房、1980年、p.340。
 - 29) アサヒビール大山崎山荘美術館学芸員・杉浦美紀、インタビュー、2006.8.22。
 - 30) 加賀正太郎『蘭花譜』芸艸堂、1946年、pp.1-2。
 - 31) 安藤忠雄「衝突こそ創造の源」『新建築』Vol.71 No.8、新建築社、1996年、p.122。
 - 32) アサヒビール大山崎山荘美術館学芸員・杉浦美紀、インタビュー、2006.8.22。
 - 33) John Urry, “How societies remember the past,” ed. Sharon Macdonald & Gordon Fyfe, *Theorizing Museums: Representing identity and diversity in a changing world*, Oxford & Cambridge, Mass., Blackwell, 1996, p.48.
 - 34) 今道友信「伝統と解釈と創造」今道友信編『芸術と解釈』東京大学出版会、1976年、p.298。
 - 35) 前掲、『日本における近代建築保存の理論的研究』p.15。
 - 36) John Urry, op.cit., pp.50-51.
 - 37) Marcus Tullius Cicero、大西英文訳『キケロー選集』第7巻、岩波書店、1999年、pp.320-326。
 - 38) 例えば、中村雄二郎は場所の問題について、「存在根拠としての場所」「身体的なものとしての場所」「象徴的な空間としての場所」の3点を挙げているが、人間存在の基礎的根拠として据えられよう。(中村雄二郎「新しいトポス論ヘートピカの遺産をふまえて」大森荘蔵他編『トポス 空間 時間』岩波書店、1985年、p.326。)
 - 39) Karl Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, Munchen, R. Piper & Co. Verlag, 1949, S.109. 重田英世訳『歴史の起源と目標』理想社、1964年、p.153。
 - 40) Klaus Mollenhauer、今井康雄訳『忘れられた連関〈教える一学ぶ〉とは何か』みすず書房、1987年、p.15。
 - 41) 五十嵐太郎『現代建築に関する16章 空間、時間、そして世界』講談社、2006年、p.184。
 - 42) 小林文人「施設にかんする法制と構成」小林文人編『公民館・図書館・博物館』垂記書房、1977年、p.42。
 - 43) 若林幹夫『都市への／からの視線』青弓社、2003年、p.111。
 - 44) 末石富太郎・橋爪紳也「ツーリズムスタディの規範化について」前掲、『ツーリズムの文化研究』p.15。
 - 45) 前掲、「ツーリストシティ研究の可能性」同前、p.76。
 - 46) 「Topics Kagawa」『四国新聞』2006.6.30、8面。
 - 47) John H. Folk, Lynn D. Dirking, Marianna Adams, “Living in a Leaning Society: Museums and Free-choice Learning,” ed. Sharon Macdonald, *A Companion to Museum Studies*, Malden & Oxford, Blackwell, 2006, p.335.

これからの博物館の在り方に関する提言について（予告）

JMMA事務局
高橋 信裕

昨年の第165回国会において「教育基本法」が改正され、現在、そのもとにある教育関連の3法（地方教育行政法、学校教育法、教員免許法）の見直しが行われつつあり、近日中にもこれら法律の改正案が国会に上程される手はずになっている。先年改正された教育基本法では、第3条で生涯学習の理念を規定するとともに、第12条においては社会教育の振興が規定され、加えて第17条は、国に「教育振興基本計画」の策定を求めており、博物館は生涯学習社会のさらなる充実に向けて、具体的に貢献することが期待されている。

博物館の現状についても、現行の「博物館法」が制定された昭和26年当時、全国で200館弱にすぎなかった博物館が、現在は5,600館余を数えるまでに増加しているなかで、当然のごとく多様な博物館像が現出し、同時に利用者の博物館に求めるニーズも高度化・多様化してきている。

文部科学省では一連の教育関連法の見直しの中に「博物館法」もその対象にあげており、審議機関として「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」（主査：中川志郎／ミュージアムパーク茨城県自然博物館名誉館長）を設け審議が行われてきたところである。

なかでも、以下の項目が喫緊の課題として検討されてきた。

- (1) 「博物館法」の博物館について
 - ・ 首長部局所管の公立博物館が数多くある現状（公立博物館全体の約1/4）
 - ・ 国立（独立行政法人を含む）博物館・美術館、首長部局所管の公立博物館、地方独立行政法人立、大学附属博物館、株式会社立博物館が博物館法の対象外になっている現状
- (2) 博物館登録制度の在り方等、博物館評価について（博物館登録制度の見直し）
 - ・ 特に公立博物館で、登録制度のメリットが乏しい
 - ・ 審査基準が曖昧で、全国的な均質性が図られ

ていない

- ・ 博物館類似施設として整備の整った博物館があるなかで、「登録を受けた博物館」のみを法の対象としているため、博物館の8割以上を占めている博物館が、「博物館法」の対象外となっている。しかも、その大半が公立博物館である
 - ・ 登録が更新制でないため、登録時の質が維持されているかどうか担保できない
- (3) 学芸員資格制度の在り方について（学芸員制度の見直し）
 - ・ 学芸員の能力・技術をレベルアップするために、経験年数や他の資格等の取得（例えば博士号など）や研究業績によって審査し、上級資格を与えることについての具体的方策（平成8年に生涯学習審議会社会教育分科審議会より「学芸員の高度な専門性を評価する名称の付与制度について」が報告されているが施行されていない）
 - ・ 学芸員の専門性を高めるため資格要件の向上の必要性の検討と現職者に対して定期的に再教育をし、資格を更新して行く仕組みの検討、高度な専門性を評価する制度の検討（平成16年に中央教育審議会生涯学習分科会より「今後の生涯学習の振興方策について」が報告されている）
 - ・ 学芸員より上位の専門資格の必要性（職務、機能、役割、呼称等）
 - ・ 専門資格の要件（特に実務経験との関わり）
 - ・ 資格審査の方法（国か第3者機関か）
 - ・ 更新制を導入すべきか
 - (4) 公立博物館の入場料原則無料規定の扱い
 - ・ 利用料金制度と指定管理者制度の扱い

JMMAでは、こうした状況を真摯に受け留め、学会としての提言を行う予定であり、広く会員諸氏より意見を募っている所である。

今号では、博物館が置かれている現状と問題点、方向性等を検討資料として掲載し、後日、会員の皆さんの提言、およびそれらを取りまとめた学会提言を発表する予定である。

博物館の現状と今後の方向性（参考資料）

	現 状	問 題 点	今後の方向性
A	a-1 文化財の保存・公開の場から地域文化の創造、生涯学習社会の拠点施設へ	a-(1)博物館の基本的機能－資料の収集・保存、調査・研究、展示・公開、教育普及、情報提供等－に対する特化への傾向、すなわち社会ニーズ、政策課題への即応の適否。	a-①利用者（市民）とのリレーションシップを基調とした学習交流事業への傾斜及び固有の文化資源を地域おこしに連動させていく機動力、マネジメント力の発揮。必ずしも、資料（コレクション）の存在を前提条件としない博物館の進展と定義の拡大
	a-2 トップダウンの意思決定で計画、設置、運営される行政主導の施設。	a-(2)地域住民の共感や理解、支援に依存しない、地域と孤立した孤高の殿堂施設	a-②地域社会のニーズや要望に基づいて計画し、地域に支持されるボトムアップ型博物館への移行。地域固有の学習資源と地域活性化化資源との融合及び相乗効果による新たな魅力の創出（生涯学習ニーズと観光開発ニーズとの連携、融合など）。地域活性化という政策課題に応えるコア施設
	a-3 一極集中から多極分散型（県・市域の均衡ある発展）を目指した施設配置から「選択と集中」による個性を重視する施策転換	a-(3)競争による淘汰がもたらす公共サービス（文化振興）の質的保障の不安定化。文化的地域格差拡大への懸念	a-③地域の個性、潜在する資源の発掘、発見、検証を行うことで、地域コミュニティに新たな価値の創造をもたらし、経済的にも活力を生む中核施設としての役割重視
	a-4「構造改革」による国の予算削減や地方自治体財政の逼迫で厳しい状況に置かれる博物館	a-(4)国立、都道府県立、市町村立、私立の博物館の競合。市場化テスト、指定管理者制度等の法制度に基づく博物館の業界化	a-④民間企業やNPO等による博物館、美術館の肩代わり経営（一部及び全体）の一般化。設置主体やミッション等による博物館の棲み分けと相互協力体制の構築（それぞれの圏域や資源をネットワーク化する「ミュージアム連携網」の構築）
	a-5 フルスペックの機能を備えた総花的な博物館から、集客や採算性を優先的に戦略化した美術館、博物館の登場	a-(5)博物館にあっては、目玉的な収蔵資料を持たないが、特色ある地域固有の文化資源（伝説や歴史など）をアトラクション装置（映像やジオラマ、パノラマ等）で演出。すなわち「モノを見せる」から「モノがたり」を伝え、体験させる博覧会的な展示演出への傾斜。また、美術館では、自館ではコレクションをもたず、他の有力な美術館、博物館と業務提携することで、経営や展示を維持、発展させる館の登場	a-⑤アトラクション性、アミューズメント性の高い展示技術の開発と導入で話題を呼ぶ。また、その一方で展示企画に特色をもたせることで活路を見出すと同時に、グローバルなスケールと仕掛け、マネジメント力を経営の軸に置く博物館、美術館の台頭が新たな潮流を形成
	a-6 すすむ既存の公立博物館の統廃合	a-(6)存続の声が市民サイドから上がらない博物館という施設。	a-⑥博物館利用方法の普及、浸透（ミュージアム・リテラシーの普及）。博物館を市民の立場から支援し、運営に携わるパートナーらの育成
	a-7 文化施策への予算削減と事業活動の沈滞化	a-(7)縦割り行政の障壁	a-⑦福祉行政と文化行政の横断的プロジェクト推進体制による博物館事業の新領域の創出と対応など、柔軟な行政内連携の構築と施策。シルバーボランティアによる支援体制の構築
全 体	a-8 地域の景観や史跡、産業、自然等を取り込んだエコミュージアムの登場と展開	a-(8)地域学、地元学の普及による地域固有の文化・観光資源の共有化	a-⑧行政主導から地域社会主導への転換（運営主体をNPOなどの地元住民や市民団体に委譲）
	a-9 今日の社会的な社会問題をテーマとする博物館施設（平和・環境・国際理解・女性・健康・防災・交通安全・人権など）の進展	a-(9)文化財をコレクションし、保存、公開していくという志向から時代が当面する社会問題を共有し、それらを解決していこうとする生活者の視点を重視する公共施設のニーズの拡大	a-⑨専門職員（教育普及担当職員ら）の確保と育成。事業活動プログラムの開発と普及。既存の他の関連機関とのネットワークの関係強化

	現 状	問 題 点	今 後 の 方 向 性
全 体	a-10学校教育における「新学習指導要領」の「総合的な学習の時間」への対応	a-10組織間及び職員相互の交流機会の確保と拡充、課題認識の共有化	a-10学校及び博物館双方の協力体制の構築（役割確認、学習プログラムの開発・運営、対応人材の育成、予算措置など）
	a-11国立博物館・美術館の独立行政法人化と市場化テストへの取り組み要請	a-11運営に対する自主裁量の委譲と求められる財政的な自助努力	a-11利用者のニーズに対応した事業活動及びそれらに伴う機能、装備の不断の見直し。集客を意識した事業計画の策定と運営（展示施設や設備の計画的なリニューアル投資、地域社会や企業との連携事業の拡充など）
	a-12博物館と利用者（市民）の間の埋まらない距離	a-12利用者ニーズの把握不足（広報活動、広報事業の軽視とマーケティング手法、営業努力の不在）	a-12マーケティング手法の導入、活用と積極的なアウトリーチ活動及び博物館利用者サイドに立った運営サービスの充実（ミュージアムリテラシーの浸透、普及）。マスコミ等との連携による広報活動
	a-13「公立博物館の設置及び運営に関する基準」（昭和48年文部省告示）の改定	a-13地方分権の推進に伴う定量的、画一的な基準の大綱化、高度化する学習ニーズや国際化、情報化等の進展に伴う現代的課題への対応、文化芸術への重要性への高まりへの対応	a-13青少年、高齢者、障害者、乳幼児の保護者、外国人等の利用促進のための「ユニバーサルデザイン」の重視。情報提供に関し、資料の「デジタルアーカイブ化やインターネット」の活用。「自己点検、自己評価」と外部への公表、「外部評価」の導入。（平成15年改定）
	a-14「登録博物館制度」の形骸化	a-14「登録博物館」の意義及び価値付けなどメリットの検証と制度の再構築	a-14既存の制度（都道府県教育委員会による審査と教育委員会所管の規定）の全面的見直し。設置主体（国、自治体、営利法人、公益法人、大学、個人など）を問わない登録博物館への門戸の開放。第三者機関による公平かつ実効性の伴った審査基準と登録の更新制度化。公立博物館の教育委員会所管の規制の撤廃
B 調 査 ・ 研 究	b-1 学芸専門職員の不足	b-1学芸職（専門職・研究職）としての身分保証と適正配置	b-1学芸員の技能習得教育の充実
	b-2 学芸職域の未分化	b-2博物館職員としての使命、知識、技能の共有	b-2専門職域（コンサベーター、レジストラー、キュレーター、エデュケーター等）の技能習得と協働意識の日常化
	b-3 タコツボ的研究体制	b-3博物館の研究課題に対して社会が無関心。同時に研究の成果が社会で評価されにくい	b-3学芸員の実績評価のあり方の検証。共同研究方式の採用と研究成果の社会への還元システムの確立
	b-4 学芸員の社会的ステータスの低さ	b-4学芸職の存在及び業務、業績の社会化が不十分	b-4各種審議会委員への専門学識者としての登用。出前講座等による研究実績の社会への還元。文科省の科学研究費助成の対象機関としての認定。大学の付属機関とすることで学芸員を教授、助教授制とし、ステータスを維持（兵庫県立人と自然の博物館）。または、国の機関（博物館・美術館等）の研究職員の「学芸員」呼称の一般化
	b-5 大学教育における学芸員資格取得の現状と実務で必要とされるスキルとの乖離	b-5高度な専門知識や現業に必要とされるノウハウを未習熟のままで資格取得が出来る現状。学芸員資格付与制度の見直し	b-5学芸員実習制度（インターン制度）の改善。就労後、専門性を評価する名称制度の制定と普及（専門学芸員、上級学芸員など）。
	b-6 市民（利用者）が博物館の資源や施設、設備等を利用して	b-6市民の学びの要求、すなわち新たな知識の形成や独自の発見、発掘を楽しむ	b-6市民研究（アマチュアリズム）の受け皿としての諸体制（人材、設備、施設等）

	現 状	問 題 点	今 後 の 方 向 性
C 収 集 ・ 保 存	自己実現を達成していくという、博物館と市民との親密な関係が未成熟	欲求や期待に対して博物館の関連機能（施設・設備等）が整備され、開放されていない	の整備、充実。「情報消費型」から「知識創造型」への脱皮。また来館者の参加体験を重視する志向から、利用者の「自己実現支援」への軸足移動
	c-1 資料の保存、修復技術に関する専門職員の不在	c-(1)保存科学処置の外部依存体制の一般化	c-①専門職員の配置及び保存科学設備の導入、充実。市民所蔵の文化財等に対する保存、修復処置への助言やアドバイス等の対応。お宝相談窓口の開設など市民サービス、ニーズへの配慮
	c-2 分類基準の未標準化	c-(2)博物館ごとに便宜的な分類法の採用	c-②博物館相互のネットワークによる分類基準の標準化
	c-3 展示できないほどの収蔵資料	c-(3)収蔵品の実質的な死（私）蔵	c-③収蔵資料のデジタルデータベース化とインターネット等による収蔵情報の提供、公開
	c-4 行政組織内での公有文化財の分散所有、管理による実質的死蔵	c-(4)資料の有効活用への工夫。組織間の縦割り管理体制の改善	c-④博物館・美術館を核とし、資料（絵画、歴史資料など）の一元管理化とデータの共有、公開利用促進（個々の所蔵資料のID化）
	c-5 文化財として認知された博物館資料の枯渇	c-(5)現代人とは縁遠い既存の文化財（古美術品）の存在	c-⑤博物館にとっての新たな資料（お宝）の発掘（海の漂流物、チラシ、玩具、漫画、生活雑器などサブカルチャー領域の博物館資料化）。美術館にあっては、現代アートとの連動
	c-6 個人のコレクターとの縁遠い関係	c-(6)博物館パートナーとしての日常的な関係樹立	c-⑥コレクションの公開の場の提供と同時に、一般市民のミュージアムリテラシー（博物館活用法）構築への連携強化
D 展 示 ・ 公 開	c-7 収蔵スペース不足からくる博物館活動の停滞	c-(7)地域の課題（高齢者福祉、学校教育の総合学習、中心市街地/空店舗の再生、企業市民との連携など）とミュージアム資源との連携融合	c-⑦地域のコミュニティ施設や福祉施設、学校の余裕教室、商店、企業のウィンドー、ギャラリー、倉庫等の利活用。高齢者の「回想療法」に役立つ博物館資料の活用法との連携
	d-1 総合展示室（一般来館者対応）、分類（分野別）展示室（研究者専門家対応）、体験学習室（子ども対応）など、展示室及び展示手法の類型化が定着	d-(1)類型化した展示デザイン、変わり映えない展示演出手法の常態化	d-①展示理念及び技術開発を含めた抜本的な改革（ハンズオンなどの参加体験プログラム、バーチャルリアリティ装置などのコンピュータテクノロジーによる技術開発等）
	d-2 展示の固定化	d-(2)展示制作の外部業者委託の一般化。予算計上のローテーションと選定業者に左右される展示更新時期	d-②マイナーチェンジ（必要に応じた展示替え）が可能な館内展示制作体制（設備・人材）の整備。学芸員でも容易に展示替えの出来る環境整備
	d-3 情報の送り手による一方通行型のお仕着せ展示。（必ずしも送り手側の展示意図通りには伝わらないという現状）	d-(3)来館者の自発的な関心、要望に応える利用者参加型展示への脱皮	d-③モノ（実物資料）との出会い、情報との出会いに対して、設定されたストーリーとは異なった視点からのアプローチが可能なサーチ機能、リンク機能を備えた展示手法の開発（ハンズオン展示、情報携帯端末装置など）
	d-4 メカニカル装置（体験操作型装置、視聴覚装置等）主流の展示	d-(4)機器との対峙による孤独で無機質な博物館体験	d-④人と人とのコミュニケーションを仲立ちとしたヒューマンなリレーションシップの構築
	d-5 社会的弱者（高齢者・身体障害者等）に対する視点の欠如	d-(5)ハード面（施設、設備、展示什器、装置等）の設計配慮不足とソフト面（プ	d-⑤ユニバーサルデザインの浸透、ハートビル法の遵守、個別対応型装置（携帯端末

	現 状	問 題 点	今後の方向性
D 展 示 ・ 公 開	d-6 学芸員による新たな研究成果が展示に直ぐに反映されにくい	ログラム等)の未整備 d-(6)展示情報を担う基本的なメディア(パネル、視聴覚機器など)のソフト更新が容易でない	等)の開発、導入と人的支援体制の確立 d-⑥情報のソフト更新が容易なシステムへの移行(LANの整備などによる情報管理の一元化。パソコンプリンター等で更新可能なグラフィックパネルなど)。展示の技術開発を民間企業の支援を得て共同開発するなど、展示を館の主たる業務に位置づける(国立民族学博物館、東京大学総合博物館、林原自然科学博物館など)
	d-7 展示情報の責任所在があいまい	d-(7)学芸員自身の展示に対する評価、当事者意識が低い	d-⑦担当学芸員による署名展示の確立、浸透(論文並みの展示評価体制の確立)
	d-8 展示に関わる著作権処理が事務量、多額な課金ともに過重な負担になっている	d-(8)博物館を公益性、公共性の強い教育機関として認知する制度が十分に機能していない	d-⑧学校の授業現場と同じく、展示に使用するコンテンツ(著作物)の複製使用の認可獲得などの法制度上の優遇
	d-9 展示制作による博物館資料(模型、ジオラマ、映像ソフトなど)の情報発信限界(見るだけ、見せられるだけの来館者)	d-(9)設計及び制作過程を通じて、研究者や郷土史家の間で行き来した知識や情報が、完成された作品(資料)からは、これらの成果が知識として来館者には伝わりにくい(この過程にこそ学習素材である情報、知識があふれている)	d-⑨市民参加による博物館展示資料の設計及び制作(ワークショップ型体験展示等)の一般化。生涯学習活動と博物館展示活動との日常的な連携構築
	d-10 来館者にとって一回限りの見学体験が多い	d-(10)知識や関心のレベルが来館するごとに段階的に成長し、発展していくといった、博物館の活用ニーズに応えるソフト及び人材、組織体制等の受け皿が未整備	d-⑩展示中心から事業中心の方向へ軸足を移行
	d-11 国際規模の良質な企画展、特別展が高額な経費負担で開催できない	d-(11)国外美術品の借り入れ(運搬、展示など)に多額の保険料等が必要となる	d-(11)海外から借り受ける美術品に対する「国家補償制度」の整備
E 学 習 交 流 (教育普及)	e-1 市民による学習・研究成果の発表の場が用意されていない	e-(1)送り手サイド(館側)にシフトを置いた運用体制	e-①幅広い、市民への利用機会の提供と施設の開放
	e-2 学習交流(教育普及)事業の重要性の浸透	e-(2)担当学芸員の個人的な熱意と努力による事業推進	e-②学習プログラム、カリキュラムの開発及び運営専門スタッフの確保、育成。教育普及活動の事業評価システムの確立
	e-3 博物館活動が館内にとどまり広く地域にまで浸透しない	e-(3)他の関連する生涯学習施設との連携と地域人材等との人的ネットワークの構築が未成熟	e-③地域の人材発掘による交流内容の充実と特色ある学習プログラムの開発。参加住民にとっては学習の成果や社会体験を地域社会に還元する機会と場の確保(専門的知識を活かしたボランティア活動が博物館を担うパートナーの位置づけへとレベルアップ)
	e-4 学校教育における「総合的な学習の時間」の開設、週五日制の実施	e-(4)学校教育の補完的な役割から脱しきれない	e-④博物館独自の学習利用方法の確立
	e-5 博物館に関心を持たない非来館者が多い	e-(5)博物館に足を運ぶのがおっくうである	e-⑤テレビ会議システム等の活用による遠隔通信講座などを開設、実施することで幅広い教育普及活動を展開し、非来館者の博物館サポーター化を図る。また、博物館の出前事(授)業を活性化する
	e-6 ボランティアの技能や経験、熱意が事業や運営に生かされていない	e-(6)パーマネントコレクションをエデュケーショナルコレクションに再生させる教育プログラムのノウハウに関して博物館サイドが無関心	e-⑥高齢者によるボランティア活動を「福祉」行政と「文化」行政との連携のもとで支援し実現(和みと癒しの「回想法」の導入など)していくなど、行政の横断的な取り組み態勢が進む

	現 状	問 題 点	今後の方向性
F 情 報 提 供	f-6 情報化への対応の遅れ f-2 進まない資料のデータベース化 f-3 ネットワークの未整備（博物館の発信する情報は博物館でしか入手できない） f-4 著作権の帰属や利用基準がいまいな博物館関連情報 f-5 多様化する個人ニーズに情報提供が対応しきれていない f-6 市民にとって、館蔵資料を研究の題材として活用することがむずかしい	f-(1)施設の建設時に情報機器の装備、拡張性等を考慮していない f-(2)情報提供の前提となる組織体制の不備 f-(3)ランニング及びメンテナンス予算及び人材の確保 f-(4)資料情報等の著作権管理体制の未整備 f-(5)ブロードバンド、ユビキタス社会への対応とIT関連産業との連携 f-(6)特別な事情やコネクションがなければ、収蔵資料の閲覧が出来ない	f-①博物館としての情報戦略の確立（LAN等の整備による館内情報システムの一元的管理体制等） f-②情報システム担当部門の設置（資料管理情報の共通化、データベースのフォーマットの標準化等） f-③インターネット等の活用により、博物館の情報が家庭や職場に居ながらにして入手できるシステムの一般化。グローバルな広がりをもった情報の受発信体制の構築 f-④著作権管理体制の整備と管理事業の外部委託化（著作権等管理事業法に基づく委託の一般化） f-⑤携帯電話や携帯情報端末等と連動させた個人ニーズに対応可能な情報検索、抽出システムの開発と採用 f-⑥閲覧、公開に関しての環境づくり、規定等の整備
G 管 理 ・ 運 営	g-1 行政評価による博物館の淘汰 g-2 指定管理者制度（財団や民間への運営委託）導入の一般化 g-3 社会教育、地方の公教育に対する行政責任及び住民の学習権の保障に対する要請 g-4 博物館活動と利用者ニーズの乖離 g-5 学芸職員の専門学術分野の偏重志向とマネジメント意識の欠如 g-6 博物館職員の職業人としてのアイデンティティの欠落	g-(1)効率性や経済性を重視した評価基準の偏り g-(2)財政の健全化とともに求められる博物館としての公共性の維持と市民の学習権の保障に対する行政責任。期限付き運営委託からくる中長期的展望に対する不安 g-(3)地方においても博物館の独立行政法人化への模索 g-(4)マーケティング的視座の欠如 g-(5)博物館職員として必要な総合力（オールマイティ）習得の仕組みの開発と定着 g-(6)博物館職員の精神的拠り所となる指標の整備	g-①博物館評価の新たな仕組みづくりへ（入館者数や経済的指標など外形的数表偏向の評価軸から、理念や目的、方針に沿った評価法の確立と自己評価、外部評価、第三者評価との整合） g-②公平かつ透明度の高い事業運営と設置責任を負う行政の関与とサポート。より強く求められる設置者である行政のガバナメント機能 g-③民間企業等によるサポート（寄付など）体制の確立と情報、財務状況などのディスクローチャーへの対応。寄付金への免税優遇措置の実現（税制上の優遇措置）、ミュージアムショップやレストラン等の収益事業による経営の自助努力の発揮。役人体質からの脱皮 g-④利用者ニーズの定期的把握と経営戦略への活用 g-⑤博物館を生涯学習の有効なメディアとして機能させる博物館専門職員（ある意味ではカリスマ雑芸員）の優遇 g-⑥ICOMの職業倫理規定等を参考にした独自の職業観意識の涵養と定着

(作成者：高橋信裕／0703)



ミュージアムを核としたネットワークや町づくりの話題、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネージメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

第6回全国企業ミュージアムグッズ 人気コンテスト入選一覧

NPO 法人企業ミュージアムの協会

亀田 訓生

NPO法人「企業ミュージアムの協会」(理事長 亀田訓生)が開催しているこのコンテストも第6回を迎えました。

優れたミュージアムグッズは企業ミュージアムの魅力を倍加させ、見学者を魅了し、ミュージアムのリピーターを増やします。また、ユニークなグッズはミュージアムのアイデンティティを際立たすことにつながり、その経営にも大きく貢献します。その活用を通して当協会の目的とする『社会教育—(生涯学習、趣味の多様化)、地域文化の振興—(地域の交流と振興と文化おこし)、子どもの健全育成』を着実に実践することができると考え、継続開催しているものです。

去る1月から4月まで公募していたものです。

- ・応募点数 77点
- ・入選点数 ベスト10賞 10点
 - 特別賞 1点
 - 奨励賞 2点

・表彰式

日時：2006年8月1日(火) 11時45分～16時
場所：大阪 千里中央 千里ライフサイエンス
センタービル20階千里クラブ大会議室

1. 企業ミュージアムグッズ人気コンテスト入選一覧

BEST 10賞 賞状 賞牌と賞金各1万円

- (1) 梓川TEPCO館「カラ松製<額>」1,400円
東京電力(株) 東電ピーアール(株)
長野県松本市奈川4442
額は、奈川村のカラ松の間伐材で作られている。ヤニが多くねじれてしまうカラ松でしたが、奈川村の企業の創意工夫により、美しい資材として生まれ変わりました。画は、大町市の高瀬ダムに流れ着くじゃま物とされていた流木を、アートとして新活用の提言をしていただいた画家斉藤清氏の作品。
- (2) 薩摩酒造文化資料館・明治蔵「さつま白波前掛け」2,700円
薩摩酒造(株)

鹿児島県枕崎市立神本町26

薩摩酒造(株)の花渡川蒸留所にある明治蔵ショップで売られている焼酎造りの心を伝えるクラシック・グッズ。色は黒、紺色。模様違いの種類もある。厚手の丈夫な綿素材壁掛け、お土産に好評。表は創業時からの伝統的ラベルデザインをアレンジ、和装からTシャツまで似合う。裏は、黒のロング丈無地のリバーシブルで、ベスト・ロングスカートにも似合うので、室内、外出着としても。ベルト風紐は長さ230センチあり、収縮性のあるメッシュで結びやすい。

- (3) 海洋堂フィギュアミュージアム黒壁「歴史英雄シリーズ 山内一豊」1,400円

海洋堂、(株) 龍遊館

滋賀県長浜市元浜町13-31

このフィギュアには、海洋堂社長宮脇修一の思いいれの高知(土佐)と長浜との地縁にちなんだ山内一豊藩主の若き雄姿が感じられる。このシリーズとしては槍足軽、鉄砲足軽、侍大将などがある。従来の菓子玩具のフィギュアシリーズに比べて精巧なつくりの特徴がみられる。NHKの大河ドラマの人気もあり大人、男性層に人気。

- (4) 夢工房技術・文化館「開運呼ぶ招き貯金タコ」1,050円

山岡金属工業(株)

大阪府守口市東郷通2丁目7番3号

家庭用ガスたこ焼き機のトップメーカーである山岡金属工業がイメージ戦略として挑んだグッズ新製品。「たこ」の赤と赤色貯金箱との連想が良い。本社内に「たこ焼きミュージアム」の創設もすすめられている。このグッズは、心身障害者(旧)授産事業を支援で一人一人が古紙再生の材料を使って手作りされた商品。通販価格1,450円。

- (5) UCCコーヒー博物館「神戸空港開港記念アロマリッチコーヒー」

上島珈琲(株)

兵庫県神戸市中央区港島中町6

2006年2月16日関西3番目の空港が神戸市マリンエアーポートとして開港したタイミングをとらえて生まれたグッズ。すぐ近くのポートアイランドに館は所在しており、本社ビルも近接

している。ブルーマウンテンブレンドのドリップ珈琲3杯分の買いやすい価格と工夫のこらされたパッケージ。裏面には、「神戸フォト散歩マップ」がイラストで描かれている。それでこの館が空港に如何に近い場所にあるかがよくわかる。

- (6) 物流博物館「ふろしき」1,200円
日本通運、(財)利用運送振興会
東京都港区高輪4-7-15

ふろしきは、一枚の布だが、包み方しだいで運ぶ道具になる。「運ぶ」ことをテーマにしている館として、運ぶ道具としてのふろしき包みを体験することができ、省資源につながる用途の広いふろしきのワークショップをおこなっている。買い物袋やレジ袋・紙袋のようにゴミにならない。その上、不要の際には小さくたためてくらしの運びに便利。重宝なふろしきの見直しのきっかけづくりとなっている。木綿製で模様、色各種ある。

- (7) 電力館「ミニカー付ボールペン」400円
東京電力(株)、東電ピーアール(株)
東京都渋谷区神南1-12-10

新しい試みとして東京電力のTEPCO館の運営をおこなう東電ピーアール(株)の本社企画で、本年4月に発売された。コストパフォーマンスに優れている。子どもが500円硬貨でおつりがもらえるとという価格設定にこだわったという。ミニカーは一方方向にしか走らない点や、ボールペンの着脱子どもの使用時の安全性について、販売時の十分な留意呼びかけが必要。他に

同種のトラックボールペンも。

- (8) JT生命誌研究館「チョウと食草のトランプ」1,260円

日本たばこ産業、(株)生命誌研究館
大阪府高槻市紫町1-1

ギフチョウ(ハート)、アオスジアゲハ(スベード)、ナミアゲハ(クローバー)、シロチョウ(ダイヤ)、の4種類の蝶を描いたトランプ。それぞれに卵から幼虫、サナギ、成虫まで12段階のイラストが食草と合せて描かれている。難しい教本を読むのではなく遊びながら自然に、蝶と植物のかかわりを学べるようになっている。多色なのがわかりやすい。

- (9) 招き猫ミュージアム「招猫菓撰」1,050円
(株)中外陶園

愛知県瀬戸市薬師寺町2番地

瀬戸市は、日本六古窯の一つに数えられ、1300年の土と炎の歴史を有する陶磁器産地である。毎年9月第4土曜日と日曜日には、「来る福招き猫まつりin瀬戸」が開かれている(9月29日をくくるふく)と読んで、招き猫の日としている)。2005年3月、瀬戸市中心市街地に開設されたこの館は、板東寛司・荒川千尋夫妻の個人コレクション「群馬県にあった日本招猫倶楽部・招き猫ミュージアム」数千点を移転し開設された。このグッズは、かわいい一対の猫、左手挙げが「人招き」、右手挙げが「金招き」と地元のお菓子屋の特製せんべい8枚と干菓子8枚が詰め合わされている。瀬戸お土産品として人気。



第6回企業ミュージアムグッズコンテスト表彰式受賞者一同

(10) ポーラ美術館「POLA CARD (ポラカード)」
1,260円

ポーラ化粧品本舗、(財)ポーラ美術振興財団
神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

ポーラ美術館のPOLAとポラロイドのポラをかけて名づけられたグッズ。このカードを使うことによって問いを見つけていく力を育むだけでなく、作品を見る目も鍛えられていく。カードの問いで作品を見てみると今までと違う視点を持つかもしれないとする。50枚のポラカードのなかからどれか1枚を選んでみると、そこに書かれているのは、今のあなたにとって必要な質問—もしかすると迷っていることを決断するための「問いかけ」かも。この質問は答えを見つけるためと同時に新しい質問を捜すためのもの等々。その使い方を説明(英文・和文)の冊子付き。

特 別 賞 賞状と賞牌

久慈琥珀博物館「琥珀の森化粧セット」

9,450円

久慈琥珀(株)

岩手県久慈市久慈19-156-133

昨年奨励賞授賞の琥珀の森化粧石鹸は博物館ショップで昨年4535個の販売を記録し、ミュージアムグッズの中心的商品になってきている。琥珀の森シリーズの化粧品セットを製作しようとする第2弾の化粧水、年末には化粧クリームを完成して今回のグッズが生まれた。琥珀の森シリーズは、世界初の琥珀入り化粧品シリーズ。地元で採掘された琥珀の有効活用と新たな琥珀の用途開発のために製作した商品が化粧シリーズ。今後も琥珀を使用した、特殊性のある商品開発に取り組む姿勢が評価できる。

奨 励 賞 賞状と賞牌

① 宮本順三記念館・豆玩舎ZUNZO(おまけやズンゾ)

「大阪名物 サブローごま&パチパチ花火」

500円

(株)あんど NPO法人 おまけ文化の会
大阪府東大阪市下小阪5-1-21山三エイトビル3階

手作り玩具キット。「サブローごま」と「パチパチ花火」と使用説明書がついている。大人も子どもも一緒になって遊ぶことができる。大阪ならではのアイデアグッズ。塗る、折る、貼る、切るなどの作る過程を大切にしている玩具。「ごま」はガラス玉、円盤、色紙の3つを合わせたアイディアのこま。回転によって色やパターンが

くるくる変る。別の色紙をはったり、絵を描いてのせるとオリジナルパターンもつくれる。「花火」は、まとめてセットし、放り投げるとパチパチとはじける愉快的な花火。室内でも安全の上、何度でも使える。

② KOBEとんぼ玉ミュージアム「ランプワークとビーズペン」4,500円

兵庫県神戸市中央区京町79日本ビル2階

アメリカのハンドメイドランプとビーズ(とんぼ玉)を用いたペン。1本ごとに組み合わせが異なり、同じものがないので選ぶ楽しさがある。館は昨年、神戸旧居留地のビル2階に開設された。いつでもガラスワークができる。多様なガラスが多く使われている商品なので、きれいだが少し重い。プレゼント、贈答用に好評。

なお、これらの情報は下記でもご覧になれます。

URL: <http://www.kigyo-museum.jp>

<http://ss4.inet-osaka.or.jp/~senri>

携帯: <http://www.just.st/302297>



特「琥珀の森」化粧セット 奨サブローごま&パチパチ花火
①カラ松製「額」 ②さつま白波前掛け ③歴史英雄シリーズ(山内一豊) ④開運招き貯金タコ ⑤アロマリッチコーヒー ⑥ふるしき ⑦ミニカー付ボールペン ⑧チョウと食草のランプ ⑨招福菓撰 ⑩POLA CARD

掲示板

JMMA第12回大会プログラム（案）

開催日時：平成19年5月19日（土）、20日（日）

開催場所：日本科学未来館（7F みらいCANホール）

大会テーマ：ミュージアム・マネージメントの再構築Ⅱ —博物館法を考える—

開催の趣旨：

昭和26年に「博物館法」が制定・公布されてから55年余の年月が経ち、昨年の第165回国会において教育基本法が改正され、今後新たに策定される教育振興基本計画において、博物館は生涯学習社会のさらなる充実に向けて、具体的に貢献することが期待されています。

現在、博物館は5,600館余を数えるまでに増加しており、多様な博物館像が出現していることから、文部科学省では「博物館の在り方検討協力者会議」を設置し、博物館の多様化、機能の高度化等最近の諸情勢を踏まえ、新しい時代に即した法制度の在り方について、現行博物館の根本である「博物館法」について検討を行うこととしています。

このような状況において、これまでJMMAが務めてきた役割をさらに増進するために、本大会を「ミュージアム・マネージメントの再構築Ⅱ —博物館法を考える—」として、ミュージアムマネージメントの立場から博物館法の在り方について考えることとしました。

【19日（土）】

- | | |
|-------------|---|
| 13：00～13：40 | 総会
①平成18年度決算・事業報告
②平成19年度予算・事業計画（案）
③委員会報告
④特別事業報告 |
| 13：40～13：50 | 大会趣旨説明 |
| 13：50～14：50 | 学会賞授与式
学会賞受賞者による挨拶 |
| 15：00～16：20 | 特別公演：「新しい博物館法の目指すもの」 中田 徹 文部科学省審議官
提 言：「新しい博物館法に望むもの」 大堀 哲 JMMA会長 |
| 16：30～18：00 | 指定討論：「新しい博物館法に求められるもの」（提言）
(1)「博物館の役割」・・・沖吉 副会長
(2)「博物館登録基準」・・・高橋 理事
(3)「学芸員制度」・・・井上 幹事
(4)「JMMAと人材育成」・・・土井・塚原理事
(5)「博物館資料と保存」・・・亀井 幹事 |
| 18：30～20：00 | 懇親会 |

【20日（日）】

- | | |
|-------------|------------------------------|
| 9：30～11：30 | 会員研究発表（7F みらいCANホール） |
| 11：30～12：00 | 研究部会・支部会報告 |
| 12：00～12：20 | 閉会式 |
| 13：00～ | アフタヌーンミュージアム
*六本木美術館巡りコース |

i n f o r m a t i o n

◆JMMAメールアドレス変更のお知らせ

このたびサーバーの移転に伴い、ホームページとJMMAのメールアドレスが新しくなりました。
ホームページでは入会申込書もダウンロードできるようになりました。

さらにメーリングリストで活発な意見の交換もできるようになりましたので、メーリングリスト登録希望の方は、下記の新しいメールアドレスあてにご連絡いただけますようお願い申し上げます。

日本ミュージアム・マネジメント学会 …… kanri@jmma-net.jp

◆年会費納入のお願い

会費未納の方は下記口座までお早めに納入下さいようお願い致します。

請求書・領収書等が必要な方は事務局までご連絡下さい。

なお、個人会員の皆様は、トラブル防止のため、お振込みの際は必ずご登録のお名前を明記のうえ、ご入金下さい。

郵便局の場合 口座番号 00160-9-123703

「日本ミュージアム・マネジメント学会」

銀行の場合 みずほ銀行 稲荷町支店 普通預金 No.1740890

「日本ミュージアム・マネジメント学会」

◆文献寄贈のお知らせ

『日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書 [I] 脚本・台本の現状と管理・保管の実態 (平成17年度)』

社団法人日本放送作家協会 日本脚本アーカイブズ特別委員会

『みのかも文化の森 年報 (平成17年度)』みのかも文化の森

『BSM Bulletin of Sugiyama Museology 12』梶山女学園大学学芸員課程・BSM編集委員会

『学芸員課程報告書 (2005年 平成17年度)』東京家政大学 文学部心理教育学科

u o i t v w j o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

伊藤 僚幸	筑波大学附属聾学校
川原 洋介	株式会社乃村工藝社
小俣 友輝	北海道大学
坂本 昇	伊丹市昆虫館
杉長 敬治	法政大学
鈴木由香利	株式会社ラール
高橋 香織	釧路市こども遊学館
橋 豊	宇都宮大学
中島 義和	日本科学未来館
見留 武士	和洋女子大学
村上 敬	静岡県立美術館
藻利 国恵	筑波大学附属聾学校

【学生会員】

李 重	九州大学大学院
片柳 圭輔	国学院大学
北村 美香	京都橘大学大学院
木下 綾	早稲田大学大学院
谿 季江	関西大学
星野 浩司	九州大学大学院芸術工学府
本間 久慧	学習院大学
三浦万智子	日本大学大学院

(五十音順・敬称略)

JMMA会報 No. 43 (Vol. 11 no. 3)

発行日 2007年3月26日

事務局 〒108-0023 東京都港区芝浦4-6-4 トウセン芝浦ビル2F TEL/FAX 03-3455-1505

編集者 高橋信裕、齊藤恵理、川瀬伊代、三次泰子、津久井真美

e-mail: kanri@jmma.net